■視察先■　全日本空輸（株）片桐インド総代表との意見交換会

■日　時■　２０２４年１２月２５日（水）１１：３０～１４：３０　デリー

■所　感■

今回、[redacted]さんからのお話を通じて、インドが世界でも最も成長著しい経済の一つであり、その中でも特にITやエンジニアリング分野における高度な人材の豊富さが、国際的に高く評価されていることを改めて実感した。これらの人材は、グローバル市場において重要な役割を果たす存在であり、日本企業にとっても大きな可能性を秘めている。

一方で、農村部では依然として若年層の就業機会が限られており、都市部との格差も顕在化している。そうした中で、インド国内の送り出し機関の強化や、若者への職業教育の充実と支援体制の整備が喫緊の課題であると感じた。また、今回の視察では、人材派遣における不透明なブローカーの存在が確認されず、非常にクリーンな形での人材送り出しが可能であるという点も、大きな安心材料であった。本市にとっても、技能実習生や特定技能制度を活用したインド人材の受け入れは、深刻化する人手不足の解消に資する有効な手段である。特に製造業などの現場においては、国際的な視野を持つ実践的な人材の確保は、企業の競争力強化にも直結するものである。

現在、他の自治体でもインドとの人材交流を活発に展開しており、本市としても、これに遅れを取らぬよう、行政と企業が連携してインドとの関係性を深め、人材獲得に向けた具体的な取り組みを推進していく必要がある。人的交流の強化は、単なる労働力確保にとどまらず、文化や価値観の相互理解を育む大きな契機にもなるはずである。

■視察先■　インド工科大学ハイデラバード校訪問（IITH）（覚書締結）

■日　時■　２０２４年１２月２６日（木）９：３０～１４：００　ハイデラバード

■所　感■

今回、IITH（インド工科大学ハイデラバード校）とのMOU締結に先立ち、[redacted]教授より大学の概要を伺う中で、同大学の教育・研究の質の高さ、そして日本との深い関わりに大きな可能性を感じた。[redacted]学長が日本での研究経験を持ち、日本文化への理解と親和性を持っていることは、今後の両国の連携にとって非常に心強い要素である。

IITH の広大なキャンパスには、先端的な研究施設と充実した教育インフラが整っており、エレクトロニクスや材料科学、機械工学といった分野において、世界的に競争力のある人材が育成されている。学生たちは将来的なキャリアとして欧米志向が強いものの、日本企業での活躍事例や、日本独自の文化的価値への関心を持つ学生も増えてきているという話を聞き、今後の関係構築の余地を大いに感じた。

特に印象的だったのは、[redacted]学長が「文化的に学ぶべきものが多いのは日本であり、インドと価値観の近い部分もある」と語り、IITH が日本とインドの架け橋になることを常に意識しているという姿勢だった。日本企業による採用促進の取り組みである「ジャパンデイ」にも毎年多くの学生が関心を寄せており、行政としてもこのような機会に積極的に関与し、浜松や日本の魅力を発信していくことが求められると感じた。

さらに、今回ネクストパーラトベンチャーズ社とも覚書を交わし、同社のジンダル社長が IITH の出身であり、スズキ株式会社での勤務経験、浜松での生活経験を有しているという背景には、深い縁と可能性が見える。こうした人材が両国の懸け橋となり、次世代の交流と発展を担っていく姿は、本市にとっても非常に希望に満ちたものである。

このMOU締結をきっかけとして、企業のインド進出支援、人材交流、産学連携の強化など、多方面からの連携を一層推進していくとともに、私たち自身もインドへの理解を深め、真の意味での双方向の交流を目指していく必要がある。今回の協定が、浜松の産業・文化・人材の発展につながることを期待し、今後も行政と企業が一体となって、持続可能な連携を模索していきたい。

■視察先■　スズキイノベーションセンター・ネクストバーラトベンチャーズ

■日　時■　２０２４年１２月２６日（木）１４：００～１５：００
ハイデラバード

■所　感■

今回、浜松市とネクストバーラトベンチャーズ社との間で覚書を締結し、インドと日本の産業連携を推進する新たなステージに踏み出すこととなった。この協定は、浜松市にとっても、次の10億人＝"Next Billion"と呼ばれるインド国内の未開拓層と向き合い、社会課題の解決に貢献する企業や人材を育てていくための、大きな一歩であると感じた。

ネクストバーラトベンチャーズは、スズキ株式会社が中心となり設立されたもので、スタートアップの柔軟で革新的な手法を活かし、インドの社会課題に取り組むインパクト起業家の育成と支援を通じて、持続可能なビジネスモデルの確立を目指している。その取り組みは、単なる企業活動にとどまらず、社会的な意義を持ち、今後のインドの発展において重要な役割を担っていくものと確信している。

また、このような取り組みを通じて、インドの深層部に入り込むビジネス展開が可能であることは、浜松市の企業にとっても新たな成長の可能性を示唆している。インド市場の成長性や、スタートアップとの協業という柔軟なアプローチを活かすことで、日本企業にも多くのチャンスが広がっていることを実感した。

今後、ネクストバーラトベンチャーズとの連携を通じて、インド社会への貢献と共に浜松の企業が持つ技術や理念を活かした新しい価値創造が進むことを大いに期待したい。そしてこの交流が、地域経済の活性化だけでなく、国際社会における浜松の存在感を高める一助となるよう、継続的な支援と関係強化を図っていく必要があると感じた。

■視察先■　アップパールスタジアム

■日　時■　２０２４年１２月２６日（木）１６：３０～１８：００　　デリー

■所　感■

クリケットは、イギリスからインドに伝わり、19 世紀にその歴史が始まった後、インドの国民的スポーツとして成長し、現代の社会にも深く根付いていることを強く感じました。植民地時代から現代に至るまで、クリケットはインドにとって単なる競技を超えて、文化的な象徴としての役割を果たしてきたと言えるでしょう。試合の中心に広がるクリケットフィールドの構造や、その規模に圧倒されるとともに、このスポーツが国民にとってどれほど重要で、どれほど多くの人々の心を捉えているのかを実感しました。

特に、クリケットの試合が行われる広大なフィールドにおいて、どの角度からでも観戦がしやすいという設計には、観客一人ひとりがゲームの流れを肌で感じられるよう配慮されていると感じました。このような施設が存在することで、インディアンクリケットの盛り上がりや、試合の興奮がますます広がるのも納得できます。

また、インドでクリケットが国民的なアイデンティティと一体化していることは、スポーツを超えて人々をつなげる力を持つことを物語っていると思います。クリケットはインドの歴史や社会、そして文化的な価値観を体現しており、これまでの困難な歴史の中で国民が団結し、共に立ち上がってきた象徴的な存在でもあると感じました。

自由民主党浜イント視察報告書

令和7年1月19日
自由民主党浜松
小野田　康弘

◆視察日程　令和6年12月22日（日）　～　令和6年12月28日（土）

◆視 察 先　インド共和国

①12/23　スズキモーターグジャラート社
②12/22　マンダル工業団地
③12/22　グジャラート国際金融技術都市（GIFT CITY）
④12/24　アーメダバード市長表敬訪問
⑤12/24　グジャラート州政府表敬訪問
⑥12/24　アーメダバード経営者協会（グジャラート州印日友好協会）
⑦12/25　全日本空輸㈱片桐インド総代表訪問
⑧12/26　インド工科大学ハイデラバード校訪問（IITH）
⑨12/26　スズキイノベーションセンター・ネクストバーラントベンチャーズ
⑩12/26　アップパールスタジアム

◆視察議員　柳川 樹一郎　濵美 誠　松本 康夫　小野田 康弘　鈴木 裕之

◆視察報告

①令和6年12月23日（月）スズキモーターグジャラート社

■目　的■

スズキ株式会社は1980年代にインドへ進出し、革新と投資を行ってきた。インドでの生産能力の強化や高品質な車両の提供だけでなく、人材開発にも力を入れている。成功のためには、現地労働者のスキルアップと持続的な学習が欠かせません。これまでの経験を通じて、インド人従業員の勤務状況やローカル企業との取引、インドの生活実態を

把握する。

■概　要■

1．設立の背景

スズキモーターグジャラート社は、スズキ株式会社の完全子会社であり、インドのグジャラート州に拠点を置いている。2014 年に設立され、2017 年には本格的な生産を開始した。スズキはインド市場において長年にわたり自動車製造を行っており、スズキモーターグジャラート社の設立は、インドにおける自動車需要の急速な拡大と、アジア市場全体での成長戦略の一環としており、その活動の拡大と強化を象徴している。また、もう一回原点に立って工場を作り直し、そしてマルチスズキの工場と切磋琢磨して競争する工場を立ち上げている。また工場は、空港から約 100km、港まで約 300km の距離に位置し、3 つの港（カンドラ、ムンドラ、キパパ）を活用している。

2．生産能力と規模

スズキモーターグジャラート社は、A 工場が 2017 年 2 月、B 工場が 2018 年の 12 月、C 工場が 2021 年の 4 月に生産開始として能力はそれぞれ工場能力年間 25 万台、年間約 75 万台の自動車を生産できる最新技術の製造施設を持っている。また、現在では累計で 380 万台の生産を行っている。

環境に配慮した設計と効率的な生産プロセス、高品質管理が特徴である工場には車体組立、塗装、検査ラインなどがあり、主にマルチ・スズキのスイフト、バレーノ、フロンクスを製造し、約 20%が輸出されています。工場敷地内には、1 週間分の生産台数である最大 23,000 台分の完成車両を置くことが可能な敷地がある。出荷する際には、トラック輸送のほかにカーボンニュートラルの点から鉄道輸送でも行われている。1 日の輸送量は、1 編成の自動車輸送用貨車で 270 台、3 から 4 編成を運行し 800 台から 1,000 台を出荷している。

敷地面積は 260 万平方メートルで、約 10 社の関連会社のサプライヤーパークが北側に立地している。スズキの湖西工場が 100 万㎡、相良工場が 200 万㎡と比べてもスズキ最大級の工場となっている。

3．雇用機会の創出と地域社会貢献

もともとは、何もない荒野に工場を建設し、事業拡大に伴い、多くの直接的な雇用機会を創出している。さらに工場周辺には、病院や社員寮を建設し住環境への投資も行っている。また製造業、技術職、管理職などさまざまな職種で現地の労働力を積極的に採用し、新しい雇用を提供している。

スズキ株式会社のインド進出は、現地の雇用機会の創出、労働者のスキルアップ、次世代リーダーの育成、地域社会への貢献、経済的支援など、多岐にわたるポジティブな影響をもたらしている。さらに、スズキは教育や医療などの社会貢献活動も積極的に実施しており、地域社会への影響を強化している。これらの取り組みにより、スズキはインド市場でのリーダーシップを確立し、持続可能な成長を支える重要な要素となっている。

■所　感■

滞在先のアーメダバード市からバスで約 2 時間半の道中は、インドの広大な風景を見せてくれました。スズキ株式会社は 40 年前にインドに進出し、自動車市場がほとんど存在しない状況下で、低価格の小型車を提供する戦略を採用しました。この「徹底したローカライズ戦略」により、インド市場で成功を収めました。その歴史の一環として、スズキモーターグジャラート工場を視察しました。

広大な敷地内の工場では、日本の工場と同様に、プレス工程、溶接工程など一連の生産ラインが自動化されていました。ただし、完成車の最終検査のラインには多くの従業員が配置され、品質管理が徹底されていました。また、日本式ものづくりを導入し、社員教育においてルールやマナーの徹底により、日本と同等の品質管理が行われています。工場は効率性を高める工夫が施され、生産ラインは一直線に配置され、部品納入のプラットホームも荷下ろしの段差がありません。単なる生産拠点の拡大に留まらず、品質管理や環境保護にも重点を置き、最新のエコ技術を駆使して環境負荷を低減する取り組みが行われています。

スズキ株式会社はインド人材の本社採用に力を入れており、現在は 40 名程度のインド人が本社に勤務しています。また、来年度には 15 名程度の採用を予定しています。製造業が多い本市の課題である人手不足を解消するため、高度人材やワーカーの獲得が必要です。多くのインド人材が浜松で活躍できる体制を整えるため、今後の受け入れ態勢と環境整備を模索していきます。

②令和6年12月23日（月）マンダル工業団地

■目　的■

マンダル工業団地には、多くの日本企業が進出しており、インドの産業発展に大きく貢献している。県内企業も入居するマンダル工業団地において、レンタル工場や日本式のものづくり学校を展開している豊田通商インディア社が運営するテクノパークを視察し、進出のメリットや課題等の現地ビジネス環境や県内企業の現地展開の可能性を探る。

■概　要■

1．設立の背景

インドのグジャラート州に位置するマンダル工業団地は、産業発展と経済成長を促進するための重要なプロジェクトとして設立された。この工業団地は、日系専用工業団地として日系企業の進出の足掛かりとインフラの整備と産業の集積を通じて地域経済を活性化し、雇用機会を創出することを目的としている。マンダル工業団地の設立は、政府と民間企業の協力の成果であり、多くの先進的な技術と設備を備えている。



2．役割

マンダル工業団地は、地域経済の発展と産業の多様化を支える重要な役割を果たしている。

豊田通商インディアは、豊田通商株式会社の子会社として、インド市場への本格的な参入を目指し、その第一歩を踏み出しました。当初は、インドにおけるモビリティの発展のために、自動車部品の製造と供給を中心に事業を展開したが、徐々にその範囲を拡大し、地域の産業基盤の強化や交通事故、交通渋滞、大気汚染等々、社会的な課題解決を踏まえた事業展開及び、インドは東西の結節点とも言われ、ここから西側、中東やアフリカとの架け橋を作っている。

また、マンダル工業団地における豊田通商インディアの役割は多岐にわたり、自動車部品だけでなく、電機、化学、物流など多岐にわたる産業のハブとして、インド国内外

への供給拠点となっている。地元の経済発展を牽引する存在として、インフラ整備や教育支援など、多方面での活動、最新技術の導入と研究開発を進め、新しい製品やサービスの創出に努めイノベーションの推進をしている。

3．企業のインド進出における課題と解決策

インド進出における課題として、慢性的に工業用地が不足し用地取得の難しさ、また優秀な人材の確保の難しさ、複雑かつ不透明な法制度対応の難しさが挙げられる。TBISはこれらの課題に対して、マンダル工業団地内において、土地建屋の取得や電力・水の確保、許認可取得支援、工場周辺サービスなどを整備し、「コンセントにつなぐだけで簡単に操業できる環境やサービスが提供」できる、プラグ&プレイ型工場の提供や人材育成プログラム、法制度対応のサポートを行っている。

インド全土で60年以上技術分野の教育を提供している学校があり、NTTFと連携して3年間のプログラムを提供し、地域の若年層と日系企業をつなぐ役割を果たしている。また、グジャラート工科大学と提携し、学生にディプロマ（専門士）を発行している。



学校施設では、安全を含む基礎教育やExcel、AutoCADなどのパソコンスキル、工作機械等の取り扱い実習を通じて学ぶことができ、学校は安全品質と日本式ものづくりの考え方を指導し、将来的に現場のリーダーとなれる人材の育成を目指している。

また、地域の労務問題に対しても、テクノパーク内の入居企業や日系企業代表者が定期的に集まり、マネジメントの視点で課題や解決策を協議する環境を整えている。さらに、インド人も含めたスポーツフェスティバルを開催し、交流・連携を促進している。

※TBIS：TOYOTSU BHARAT INTEGRATED SERVICES Pvt Ltd

■所　感■

マンダル工業団地では、ASTIや村上開明堂、ROKIなどの県内企業が多く入居し、事業展開を行っています。特に、2017年からプラグ&プレイ工場をコンセプトとした日本企業向けの貸工場事業を行い、企業のインド進出を支援している状況です。

現在、多くの企業がインドに進出していますが、インド進出には多くの課題がありま

す。広大な土地を有するインドでも工業用地の確保が難しく、中小企業ではサプライチェーンの構築や関連会社の支援が必要です。また、現地での人材確保は課題となっており、ホワイトワーカーでは採用に時間がかかり、労働環境により流動性が高くなっています。一方、ブルーワーカーでは農耕地域であるため、工業用人材の確保が困難です。この団地では、人材育成事業を通じて、グジャラートに進出する日本の中堅・中小企業が求める人材の育成と確保、事業運営の支援を行っています。

今回、同団地内の学校を視察しました。パソコンのスキルや工作機械等の取り扱い、安全品質と日本式のモノづくりを指導し、将来的には現場でのリーダーとして後続を指導できる人材の育成を目指しています。

インド市場の成長を鑑みると、日本企業のインド進出は魅力的です。インドでのビジネス展開を模索する日本企業は少なくないでしょう。マンダル工業団地のように日本企業専用の団地の需要は多いと予想されます。また、豊田通商インディア社のように進出の労力を省力化する事業や、人材教育は重要です。本市の企業がインドで活躍できる環境を整え、本市とインドの関係強化につなげる必要があると思いました。

③令和6年12月23日（月）グジャラート国際金融技術都市（GIFT CITY）

■目　的■

インドのグジャラート州に位置するGift City（Gujarat International Finance Tec-City）は、インド政府の主導で設立されたインド初の特別経済区（SEZ）である。現地の最先端ビジネスや都市開発の状況、ネクストバーラトベンチャーズIFSプライベートリミテッドによる社会起業家支援の状況を把握する。

■概　要■

1. GIFT CITY設立の背景

Gift Cityは、インドの国際金融センターとしてインド国内外の企業に対して、競争力のあるビジネス環境を提供し、新しい投資と雇用機会を創出するために設立された。HSBC、スタンダードチャータード銀行、シティバンクなどの国際的な銀行が入居、これらの組織はGift Cityの戦略的な立地と優れたインフラを活用し、国内の主要銀行であるインドステート銀行（SBI）やICICI銀行も拠点を設けており、インドの金融市場の発展に貢献している。さらに、JPモルガンやゴールドマン・サックスなどの投資銀行もGift Cityに進出しており、これによりGift Cityは国際金融センターとしての地位を

さらに強固なものとしている。世界中の金融機関や投資家を引き寄せ、インド国内外の資本市場と金融サービスを一体化することを目指している。この取り組みは、外国投資家や多国籍企業から高く評価されており、インドの経済成長に大きく貢献している。特に、規制緩和と税制優遇措置が企業にとって魅力的な条件を提供し、多くの投資を呼び込んでいる。



2．ネクストバーラトベンチャーズ IFS プライベートリミテッド設立の背景

ネクストバーラトベンチャーズ IFSC プライベートリミテッド(Next Bharat Ventures IFSC Private Limited) は、インドの国際金融サービスセンター（IFSC）に設立された新興企業である。2024 年、スズキ株式会社がインドにおける 100%子会社として設立し、インド国内外の投資機会を最大限に活用して先進的な金融サービスを提供することを目的としている。

また、ネクストバーラトベンチャーズ社は、インドの社会課題をビジネスの力で解決することを目的に、ファンドを通じて農業や金融包摂、サプライチェーン、モビリティの分野で活動する社会起業家への支援や投資を実施するほか、ベンチャーキャピタルへの投資も予定している。

なお、スズキ株式会社は、ネクストバーラトベンチャーズ社の活動を通じてインドの人々とモビリティ分野を超えたつながりを築き、インドの更なる発展への貢献を目指している。

■所　感■

GIFT CITY は、モディ首相によって構想された国際金融センターであり、インドで最も先進的なスマートシティです。土地面積 3300 エーカーの中に、国際関税地域（625 エーカー）と特別経済区（261 エーカー）が含まれています。また、スマートオフィス、住居、病院などの建設が進行中であり、都市としては発展途上にあります。アーメダバード空港から 20 分、新幹線ターミナルから 15 分程度の距離にあるため、交通アクセスの利便性が高いです。

今回の視察で、GIFT CITY を通じてインドの経済成長の本質が見えてきました。インドは 2047 年までに先進国入りを目指しており、国際金融サービスセンター（IFSC）の整

備により経済基盤を強化しています。しかし、インドが輸出国として成長するためには、税制、インフラ、技術、人材育成など多くの課題が残されています。この課題解決には、日本の生産管理の概念や協力が不可欠です。その場合、私たちの企業にとってもインド市場への進出の可能性が高まります。また、インドでは高度 ICT 人材が豊富ですが、多くが欧米での就職を希望している現状があります。日本および本市では高度 ICT 人材が不足しているため、行政、企業、教育機関との連携を深める必要があります。

ネクストバーラトベンチャーズ社の開所式が行われ、40 年以上インドでビジネスを続けているスズキ株式会社が次の 10 億人（Next Billion）と呼ばれる層と関わり、インドのさらなる経済成長に貢献することを目指しています。この組織は、インド各地の社会課題を解決するインパクト起業家の支援を行っています。インパクト起業家の活動事例も紹介され、ビジネスを通じて価値を創出し課題を解決する取り組みが紹介されました。また、日印協業による Next Billion への新たな価値創造と日本企業のインドにおけるビジネス機会の理解を促進し、新市場の共同創造を目指しています。本市もビジネス機会を創造するために、インドの現状把握と情報ネットワークの構築が必要であると感じました。

④令和 6 年 12 月 24 日（火）アーメダバード市長表敬訪問

■目　的■

インドとの市民レベルでの友好関係を構築するため、文化的な交流だけでなく、スポーツ、教育などあらゆる分野の交流の可能性を探る。

■概　要■

1．アーメダバード市

アーメダバード市はインドのグジャラート州に位置しており、同州最大の都市です。サバルマティ川沿いに広がるこの都市は、約 750 万人の人口を抱えています。急速な成長と発展を遂げており、インド全体でも重要な経済と文化の拠点となっています。

また、インドの主要な経済都市の一つであり、繊維産業の中心地として「インドのマンチェスター」とも称されおり、近年では IT、製薬、自動車産業など多様な産業が発展し、経済の多角化が進んでいる。また、数多くの企業やスタートアップが集まるビジネスハブとしても知られている。

その豊かな歴史と文化、多様な経済基盤、そして未来への展望を持つ魅力的な都市です

ある。

2．カイト（凧）について

毎年1月中旬に開催されるカイトフェスティバルです。この祭典は「ウッタラーヤン」とも呼ばれ、インド全土から多くの観光客が訪れる一大イベントである。

3．MOU締結に向けて

浜松市とアーメダバード市との間でMOU締結に向けて、両市の一層の発展を目指し、多分野での交流をさらに促進させるための書簡をアーメダバード市長へ渡した。

■所　感■

今回の視察では、アーメダバード市との友好協定の締結はインド政府の許可が得られず未達となり、浜松市とアーメダバード市は幅広い分野で連携促進を確認しました。中野祐介市長はアーメダバード市のプラティバベン・ジャイン市長に協力を求める書簡を手渡し、両市は2025年度に友好協定を締結することを目標に交流を開始する予定です。浜松市はインドとの経済交流を強化し、市内企業の海外展開や高度人材の獲得を促進しています。この覚書は、両市の協力関係を深め、二つの異なる文化と経済圏が理解し合う重要なステップです。持続可能な協力と交流を促進し、国際的な理解と友好を深めたいと思います。



⑤令和6年12月24日（火）グジャラート州政府表敬訪問

■目　的■

グジャラート州政府と強固な関係を築くため、同州政府を訪問し州首相表敬や静岡県との友好協定締結式を行う。

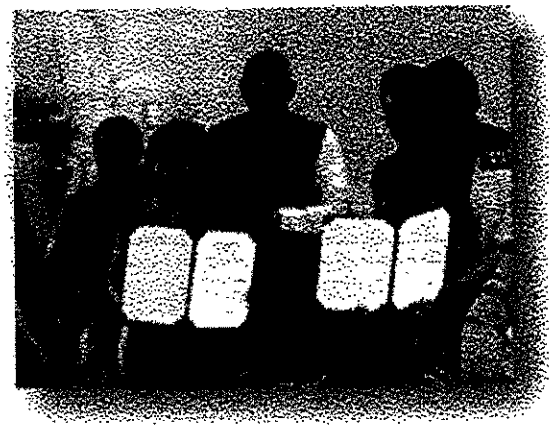
■概　要■

1．グジャラート州

グジャラート州は、インド西部に位置する豊かな歴史と文化を持つ州である。アラビア海に面し、インドで最も工業化され、商業的に発展した地域である。人口約6000万人を擁するインドの主要州の一つであり、人口は多様で、ヒンドゥー教徒、イスラム教徒、ジャイナ教徒、キリスト教徒などが共存している。古代から交易の要所として栄え、多くの商人や探検家がこの地を訪れている。モーリヤ朝、グプタ朝、チャウルキヤ朝、ソルンキ朝、ムガル帝国など、さまざまな王朝の統治下で文化と経済が発展してきた。特にアフマダーバードは、中世イスラム建築の宝庫としてユネスコの世界遺産に登録されている。

2．静岡県との友好協定の締結ついて

両地域は過去数年間にわたり、経済的および文化的な交流を続けてきた。グジャラート州はインドの経済的中核地であり、製造業や商業が盛んな地域である一方、静岡県は日本国内での産業と観光の重要な拠点であり、経済交流や文化交流を促進するための友好協定を締結した。この協定は、両地域の持つ豊かな文化と経済力を活かし、相互の発展を図ることを目的している。



■所　感■

今回の視察の目的である静岡県とグジャラート州との友好協定が、無事締結された。この友好協定により、グジャラート州と静岡県は経済的、文化的な結びつきを一層強化し、

互いの発展と繁栄に寄与することが期待されている。特に、両地域の若者たちに新たな学びや経験の機会を提供することで、未来のリーダーを育成することができると思われる。

グジャラート州と静岡県の友好協定は、地域間の連携が国際的なレベルでどのように機能し、成功するか今後の動向を見守っていきたい。



⑥令和6年12月24日（火）アーメダバード経営者協会（グジャラート州印日友好協会）

■目　的■

インドとの市民レベルでの友好関係を構築するため、音楽、美術、伝統芸能など文化的な交流及びアーメダバード経営者協会と静岡市及び浜松市の経済界の交流の可能性を探る。

■概　要■

1．アーメダバード経営者協会



アーメダバード経営者協会（Ahmedabad Management Association、略称AMA）は、インドのグジャラート州アーメダバード市に拠点を置く非営利の経営者団体である。AMAは1956年に設立され、地域のビジネスリーダー、企業経営者、専門家たちのための学習と交流の場を提供することを目的とし活動している。その設立以来、AMAは地域経済の発展と持続可能な成長を支える重要な役割を果たしてきた。1950年代のインドは、独立後の経済発展と産業化の進展に伴い、経営知識とスキルの向上が求められ、特にグジャラート州は商業と産業活動が盛んであり、ビジネスリーダーたちが集う場所が必要とされてきた。AMAはそのようなニーズに応えるべく、地域の産業界と学術界のリーダーたちの協力によって設立された。

2．グジャラート州印日友好協会

グジャラート州印日友好協会は、インドのグジャラート州と日本の間の関係を強化及び、理解促進を目的に 1975 年設立された。

事業としては、アーメダバード経営者協会（AMA）と提携して日本の伝統文化や現代文化を紹介するイベントやワークショップを開催し、インドの人々に日本の魅力を伝え、また、インドの文化を日本に紹介する交流イベントも積極的に行っている。その他、グジャラート州と日本の企業間のビジネスマッチングや投資促進イベントを開催し、経済協力を推進し、両国の経済発展に寄与している。会長は、[redacted]氏。

■所　感■

AMA は、日本の教育機関や企業と連携し、研修や交流プログラムを実施してきました。これにより、両国のビジネス文化と経営手法の相互理解が深まりました。また、日本文化イベントやフェスティバルも共同開催し、文化交流を推進しています。

これらの活動は、経済的、文化的、教育的な面で重要です。今後も両国の交流が深化し、友好関係が強化されることが期待されます。この協力関係は、他国にも有益なモデルとなるよう、さらに展開していきたいです。



⑦令和 6 年 12 月 25 日（水）全日本空輸㈱片桐インド総代表訪問

■目　的■

日本とインドとの交流人口の現状と拡大の可能性を学ぶとともに、交流を深めるための秘訣を探る

■概　要■

1．全日本空輸㈱デリー支店　インド総代表兼デリー支店長 [redacted]氏

[redacted]氏がインド人材に着目したきっかけは、コロナ禍で飛行機が運行再開になると間違いなくお客さん戻ってこないということが想像していた。何とか新しい需要を開拓し

ていかないと、この先厳しいなと思って考えていた矢先に、ベトナム人の技能実習生のネガティブな報道をテレビで見て、インドはどうなっているのかを調べ始めたことでインド人材に徹底的にのめり込むようになった。

日本では、インドの送り出し機関の現状を把握していないと考え、日本にこのインド人材のクオリティの高さ、良さを知ってもらうことを念頭に、まずはインドの各地のセミナーに行って日本を知ってもらう取組や、国や市間とか管理団体と協力しながらマッチングイベントを行っている。

2．インドの人口分布の特徴

インドの場合は、人口ピラミッドが非常にきれいな釣り鐘型で人口ボーナスの形をしている。インドでは、ティアワンという400万人以上の都市が8つあり、ニューデリー、ムンバイ、ベンガルール、チェンナイ、コルカタ、アーメダバード、ハイダラバードなどが、400万人以上の都市と言われている。14億人いて、400万人以上の都市が8大都市を合わせても1億人もいかない。しかも若者の多くは圧倒的に農村部にいて、しかも20代の若者に仕事がなくて困っている状況となっている。

3．インドの送り出し機関の特徴



管理団体雇用主さんと送り出し機関との関係では、管理団体雇用主がインドのことをあまり知らない。実績がある国で十分なのでインドをわざわざやらない送り出し機関が存在し、アクティブな送り出し機関がまだ少ない状況である。それと送り出し機関としても、他の国に送り出したほうが楽だし、コミッションも高いし、日本だと日本語を教えなければいけないとのこと。

一方で、今のところブローカーが存在してない。非常にクリーンな送り出しができているという実態である。

コロナ当時、この送り出し機関を調べると、実績があったのが18社あったが、数が少ない。悪質なブローカーもいないので、今やっていただくと非常にクリーンな送り出しができる。とにかくやっぱり日本側が知らない。

4．インド人材の受け入れについて

横浜市緑区霧が丘の団地にインド人 800 人が住んでいる。横浜市がインドの企業を誘致したためだが、日本人とうまく共生している。公園ではインド人と日本人の子が一緒にサッカー遊びをして英語でコミュニケーションをとっている。また、インド人材が日本に来る上で、受け入れ側として注意点は特にない。

■所　感■

[redacted]氏の説明によると、インドは世界で最も急速に成長している経済の一つであり、その豊富な人材は多くの企業にとって魅力的です。特に IT やエンジニアリング分野には高度なスキルを持つ専門家が多く、グローバルな人材市場において重要な位置を占めています。しかし、農村部における若者の失業問題を見ると、インドの送り出し機関の充実と支援の必要性が浮き彫りとなります。また、人材派遣のブローカーも確認されておらず、非常にクリーンな送り出しが可能であることが判明しました。本市としても、インド人技能実習生及び特定技能の受け入れは、人手不足に悩む企業への支援に寄与することが期待されます。現状では、他の都府県でもインド人材の獲得に向けた活動が活発化しています。本市においても、インドとの交流事業の中で人材獲得に向けた働きかけを行政と企業が共同で推進する必要がありと感じました。



⑧令和 6 年 12 月 26 日（木）インド工科大学ハイデラバード校訪問（IITH）

■目　的■

すでに協定を締結している静岡大学との連携の強化及び、市内の他大学との学術交流の可能性を探る。また、IITH で学ぶ目的や今後の人生設計等について学生の意見交換を行う。

■概　要■

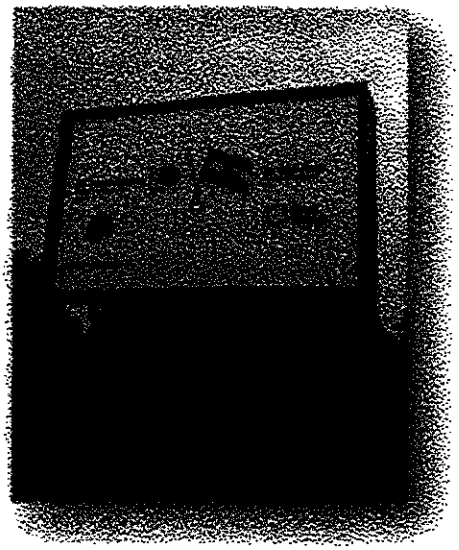
1．インド工科大学ハイデラバード校（IITH）



インド工科大学ハイデラバード校（IITH）は、インド政府によって8番目に設立された工科大学の一つで、2008年にインド南部テランガーナ州ハイデラバード市に設立された。インド工科大学（IIT）は全国に23校あり、IITHは8番目に設立された。1950年代60年代にIITがシステムとして作られて実際に大学として機能し始めてから約7校が第一バッジとして作られた。初めにできたバッチのIITのことを、伝統校などと呼んでいる。

このIITHは、インド国内の技術教育の質を向上させ、さらには世界的な技術革新の中心となることを目的とし、理工系分野における教育と研究の中心地として広く認知され、エンジニアリング、科学、技術、そして人文社会科学における幅広い学部および大学院プログラムを提供しており、多様な分野での人材育成を行っている。

さらに同大学は、AI（人工知能）分野において世界で3番目に専門学科を設置した大学であり、スマートモビリティやロボティックスなどの多分野の研究者と連携して先端的な研究を行っている。また、学生の起業支援やインキュベーションセンターの活用など、企業文化の醸成にも力を入れている。



IITHの設立と運営には、インド政府からの多額の資金が投じられているが、多くは日本からの支援である。日本国際協力機構（JICA）による資金援助を通じて、キャンパスのインフラ整備や研究設備の充実が図られている。この国際的な支援によって、IITHは高度な研究設備とインフラを備えた教育機関としての地位を確立した。

2．学生の企業支援

IITHでは、学生の起業支援に非常に力を入れている。特に、学生が新しいビジネスアイデアを持ち込むことを奨励しており、確かなアイデアが確認された場合には、大学が資金を提供する。例えば、ビルダプロジェクトというプログラムでは、学生が技術のアイデ

アを持ち込むと、大学がそのアイデアを評価し、確からしいと判断された場合には資金を提供する。

さらに、インキュベーションセンターを活用して、学生が実際に起業するためのサポートも行っている。起業が成功した場合、大学での学位取得を待たずに実業に進むことが奨励されており、その際修了証が発行される。また、起業が失敗した場合でも、セーフティーネットとして新卒の採用活動に参加できる仕組みが整っている。

このように、IITH は学生が挑戦しやすいエコシステムを作り上げており、学生が守られながらも挑戦できる環境を提供している。

3．インド工科大学ハイデラバード校と静岡大学との連携

インド工科大学ハイデラバード校と静岡大学は、国際的な研究と教育の協力を強化するための 2017 年に連携協定を結んでいる。この連携により、両大学は学生交換プログラムや共同研究プロジェクトを推進し、それぞれの強みを活かした相乗効果を生み出している。

具体的には、IITH と静岡大学は、環境技術やエネルギー効率化技術などの分野で共同研究を行っている。これにより、持続可能な開発に向けた新しい技術やソリューションの開発が進められている。さらに、双方の学生や研究者が互いのキャンパスを訪問し、異文化交流や専門分野の知識を深める機会を持つことで、国際的な視野を広げることが期待されている。

この連携は、インドと日本の技術交流と文化理解を促進する重要な枠組みとなっており、両国の未来の技術革新と経済発展に寄与することが期待されている。

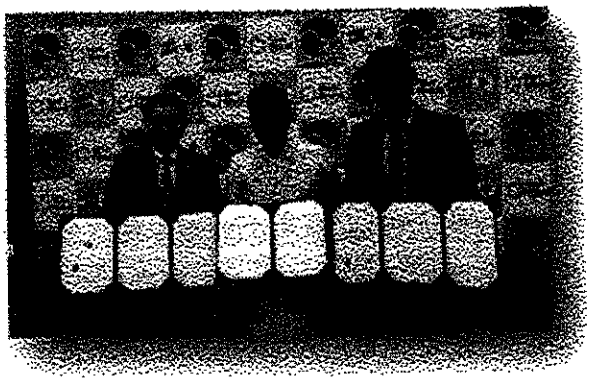
4．MOU 締結式

・浜松市と IITH 校との人的・経済交流に関する覚書を締結。

IITH の学生等や双方地域の企業等が相互に活発に人的交流・経済交流をすることができるよう、双方が共同して支援することを目的とする。

・浜松市とネクストバーラトベンチャーズ IFSC プライベートリミテッドとの間で覚書を締結。

両当事者間の産業交流を促進し、浜松市とインドと日本産業連携の架け橋として位置付け、地域の産業成長に寄与することを目的とする。



■所　感■

MOU 締結式前に IITH の[redacted]教授に大学の概要を伺った。同大学の[redacted]学長は、1999 年から 2001 年の間に筑波大学で研究者をしていた経歴があり、日本との連携に積極的に取り組んでいた。また、日本の文化に精通していた。

IITH の敷地は広大であり、最新の研究設備と充実したインフラを備えている。学生や研究者が最先端の研究を行う環境が整っており、特にエレクトロニクス、材料科学、機械工学などの分野での研究が盛んである。

また、同大学の学生は、欧米企業への就職を目指している学生が多いと聞いた。MOU 締結式では、[redacted]学長が日本は文化的に強い側面があり、インドと似ているところがあるため学ぶべきことが多いと述べ、IITH が日本とインドの架け橋になれると考えていると挨拶した。毎年、日本企業を集めたジャパンデイというイベントを開催している。このようなイベントに行政も積極的に関与することで、日本や浜松に対する関心を高める必要があると感じた。

スズキ株式会社は IITH からの採用を増やしており、日本に興味を持つ学生が増えているとの情報もあった。また、ネクストバーラトベンチャーズ社との覚書も交わし、両者間の産業交流の促進、人材交流、知識共有、機会創出など様々な協力体制を確立することが重要であると考えた。この MOU 締結が浜松の産業や文化の発展につながるよう、行政・企業とともに取り組んでいきたい。

⑨令和 6 年 12 月 26 日（木）スズキイノベーションセンター・ネクストバーラントベンチャーズ

■目　的■

インドとの交流を深める方法やインドの社会課題解決に挑戦している手法を学び、本市の課題解決に横展開できる手法であるか確認する。

■概　要■

1．スズキイノベーションセンター

スズキイノベーションセンターは、インド市場におけるスズキ株式会社の活動の一環として設立された。設立の背景には、現地のスタートアップとの協力が大きく寄与している。スズキ株式会社は、インド国内のスタートアップと積極的に連携し、イノベーションを推進している。

業務内容としては、特に電動車両、自動運転技術、スマートモビリティソリューション

などの分野での協力が重要であり、例えば、電動車両のバッテリー技術や再生可能エネルギーを利用した製造プロセスなどが挙げられる。

また、スズキ株式会社はインドにおける持続可能な発展にも注力しており、環境に優しい製品やサービスの開発が進んでおり、これには低排出ガス車両やリサイクル可能な素材の使用などが含まれる。

スズキ株式会社は、インド国内のスタートアップと積極的に連携し、さまざまなプロジェクトを進めている。例えば、インド国内のスタートアップと連携して、電動車両の開発プロジェクトを進め、これにより、環境負荷の低減とともに、インド市場における電動車両の普及を目指している。また、ン: スマートシティプロジェクトの一環として、インドのスタートアップと共同でスマートモビリティソリューションを開発している。これには、自動運転技術や交通管理システムの導入が含まれ、都市の交通問題の解決に寄与している。



2．ネクストバーラトベンチャーズのインパクト起業家について

ネクストバーラトベンチャーズは、社会的課題の解決を目指すインパクト起業家に対して積極的に支援を行っている。具体的には、インパクト起業家がその活動の効果を測定し、評価するための方法を提供している。これにより、起業家は自分たちの取り組みがどのように社会に貢献しているかを明確に示すことができる。資金調達の支援として、インパクト起業家が必要な資金を調達するためのサポートを行っている。これには、投資家とのマッチングや資金調達の戦略策定が含まれる。また、持続可能なビジネスモデルの構築支援として、インパクト起業家が長期的に成功するための持続可能なビジネスモデルを構築する手助けをしている。

これらの支援を通じて、ネクストバーラトベンチャーズはインパクト起業家がその使命を達成し、社会に具体的な変化をもたらすことを支援している。

■所　感■

この度、浜松市とネクストバーラトベンチャーズは覚書を締結し、浜松市とインドおよ

び日本産業連携の架け橋となることが決定いたしました。スズキ株式会社は、インド国内にはまだ10億人もの未開拓の市場が存在すると見込み、社会課題の解決を目指してスタートアップの手法を活用する方針を掲げました。そのため、新たにネクストバーラトベンチャーズを設立し、インパクト起業家の育成や資金支援を通じて、インドの奥深くまで活動を展開しようとしています。インド市場の成長に伴い、日本企業がスタートアップ企業との協業を通じてインド進出を図る選択肢も浮上しております。今後、ネクストバーラトベンチャーズを通じて、インド社会に多様な貢献を果たす浜松の企業が誕生することを期待いたします。

⑩令和6年12月26日（木）アップパールスタジアム

■目　的■

インドにおいて国民的スポーツとなっているクリケットスタジアムを視察し、スポーツ振興の面での連携可能性を探るとともに、クリケットに対する知見を深め。今後の施策に活かす。

■概　要■

1．アップパールスタジアム

ラジーヴ・ガンディー国際クリケットスタジアムは、インドのテランガーナ州ハイデラバードに位置する国際クリケットスタジアムである。このスタジアムは、ハイデラバードクリケット協会が所有および運営しており、一般的には「アップパールスタジアム」としても知られている。スタジアムは16エーカーの土地に広がっており、収容人数は55,000人である。2005年に開業し、インディアン・プレミアリーグ（IPL）やワールドカップの試合など、多くの重要なクリケット試合が開催されている。

スタジアムのデザインは、観客がフィールドのアクションを見やすいように設計されており、最先端の設備を備えており、また、スタジアム内には巨大なスクリーンやサウンドシステムがあり、試合の興奮をさらに高めている。

2．クリケット

インドではクリケットが国民的なスポーツとして非常に人気があり、クリケットはインド人にとって単なるスポーツではなく、生活の一部であるような存在である。道端で子どもたちがバットとボールを手に遊んでいる姿や、テレビの前で熱狂する人々の姿が日

常的に見られる。

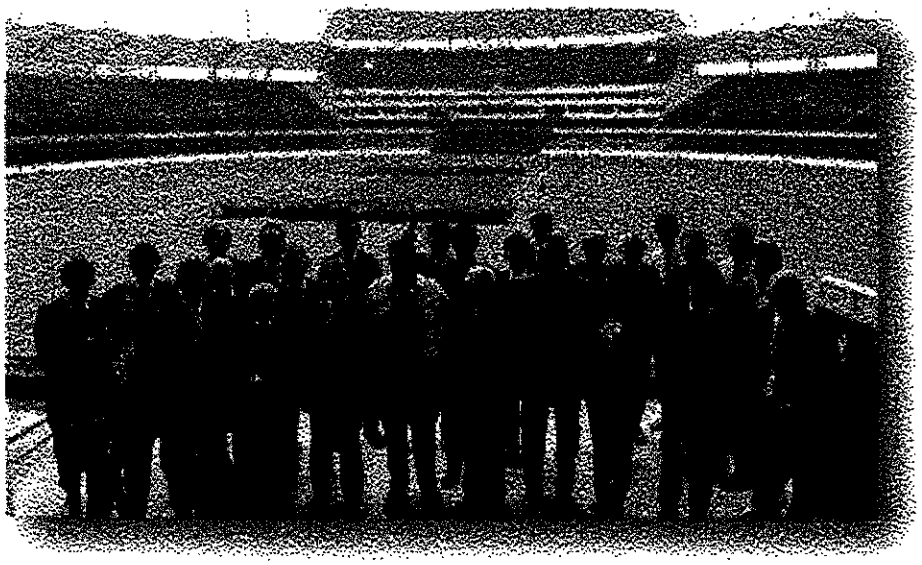
クリケットがインドで大人気な理由には、歴史的背景や文化的な影響力、そして商業的成功が深く関係しており、特に、インディアン・プレミアリーグ（IPL）の登場は、クリケットの人気をさらに押し上げた。IPL はインド国内外で非常に高い視聴率を誇り、多くのスポンサーが集まる一大イベントとなっている。



また、インドのクリケットチームは数々の国際大会で優勝を果たし、その実績は世界でもトップクラスである。特に、ICC クリケットワールドカップや T20 ワールドカップでの勝利は、インドクリケットの歴史で重要な勝利でした。

■所　感■

クリケットは、イギリスからインドに持ち込まれたスポーツであり、その歴史は 19 世紀にまで遡ります。インドでは国民的スポーツとして成長しています。クリケットスタジアムの中心には、直径 120～150 メートルの円形の芝生エリアが広がり、その中央には長さ 22 ヤード（約 20.12 メートル）のピッチがあります。これは試合の主要な舞台です。フィールドは楕円形構造であり、どこからでも観戦がしやすく設計されています。この競技は植民地時代から現代に至るまで、多くの困難と成功を経て、インドの文化とアイデンティティの重要な一部となっていると感じました。



■全体所感■

インドは現在、世界で最も急成長している経済の一つとされており、IT 産業、製造業、サービス業など多岐にわたる分野で著しい発展を遂げています。1991 年の経済自由化以来、着実な経済成長を継続しています。特に IT 産業は国際的に評価され、バンガロールは「インドのシリコンバレー」として名高い存在です。また、インドは技術革新とイノベーションの分野で指導的役割を果たしており、スタートアップエコシステムが急速な拡大を見せています。政府は「デジタル・インディア」や「メイク・イン・インディア」などのプログラムを通じて技術革新を支援しており、多様な分野での成長と発展が予測されています。しかしながら、持続可能な発展を実現するためには、貧困、不平等、環境問題などの重要課題に取り組む必要があると感じました。

さらに、質の高い教育と人材育成はインドの持続的な発展に不可欠です。インド政府は教育インフラの整備と教育の質向上に注力しており、特に農村部や貧困層の教育機会の拡大に取り組んでいます。IITH との覚書締結は将来の人材受け入れ基盤を築くものであり、本市が抱える人手不足の解消および企業の持続可能な経営の安定化につながると期待されます。

今回のインド訪問は、本市とインドの交流の第一歩として位置づけられ、相互交流を本格化させ、産業・文化・教育の発展に寄与する可能性を秘めています。今後の展開が非常に楽しみです。最後に、今回の訪問に際して準備、調査、視察にご協力いただいた多くのインドの関係者に深く感謝申し上げます。

令和７年１月20日
自由民主党浜松

視察報告書



浜松市議会議員

鈴木 裕之

インド出張　全体日程表

2024.12.20現在

No.	期日	曜日	時間	内容	備考
1	12/22	日	10:20	中部国際空港発【SQ671便（シンガポール航空）】	
			16:30	シンガポール・チャンギ国際空港着（シンガポール）	
			18:40	シンガポール・チャンギ国際空港発【SQ504便（シンガポール航空）】	
			21:50	インド・アーメダバード空港着【専用車】（インド・アーメダバード）	
			22:30	ホテル着、チェックイン	
				【現地ホテル：ハイアットリージェンシーアーメダバード　泊】	
2	12/23	月	7:30	ホテル発【専用車】	
			10:00	スズキ・モーター・グジャラート社訪問	
			13:30	マンダル工業団地視察	
			17:00	国際金融技術都市（GIFT CITY）視察	
				ネクスト・パーラト・ベンチャーズ開所イベント（夕食会）	
			20:45	ホテル着	
				【現地ホテル：ハイアットリージェンシーアーメダバード　泊】	
3	12/24	火	8:30	ホテル発【専用車】	
			9:00	アーメダバード市役所訪問（アーメダバード市長表敬）	
			11:00	グジャラート州政府訪問	
				グジャラート州首相主催昼食会	
			15:00	アーメダバード経営者協会（ジャパンセンター）訪問	
			17:30	ホテル着	
			18:00	現地関係者とのネットワーク構築会（夕食会）　※宿泊先ホテルにて	
				【現地ホテル：ハイアットリージェンシーアーメダバード　泊】	
4	12/25	水	6:30	ホテル発【専用車】	
			7:00	アーメダバード空港着	
			8:40	アーメダバード空港発【AI2946便（エア・インディア）】	
			10:30	インディガラ・ガンディー国際空港着（デリー）【専用車】	
			11:30	全日本空輸㈱デリー支店MTG（昼食含む）	
			17:35	インディガラ・ガンディー国際空港発【AI2879便（エア・インディア）】	
			19:50	ハイデラバード空港（ラジーヴ・ガンディー国際）着【専用車】	
			20:30	ホテル着	
				【現地ホテル：ル・メリディアン・ハイデラバード　泊】	
5	12/26	木	8:00	ホテル発【終日専用車】	
			9:30	インド工科大学ハイデラバード校/SIC訪問（MOU締結式・視察）	
			14:00	インド工科大学ハイデラバード校出発	
			15:45	アップパールスタジアム（クリケット）視察	
			17:30	アップパールスタジアム（クリケット）発	
			18:30	ホテル着	
				【現地ホテル：ル・メリディアン・ハイデラバード　泊】	
6	12/27	金	8:00	ホテル発【専用車】	
			9:00	ハイデラバード空港（ラジーヴ・ガンディー国際）着	
			11:15	ハイデラバード空港（ラジーヴ・ガンディー国際）発【SQ519便（シンガポール航空）】	
			16:30	シンガポール・チャンギ国際空港着（シンガポール）	
				【空港泊】	
7	12/28	土	1:20	シンガポール・チャンギ国際空港発（シンガポール）	
			8:30	中部国際空港着	

【現地ホテル】

■ アーメダバード　12月22日・23日・24日

ホテル名：Hyatt Regency Ahmedabad

住　　所：17/A, Ashram Road Ahmedabad, 380014 INDIA

電　　話：+91-079-40171234

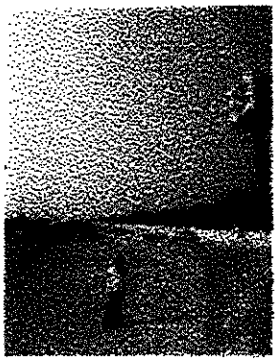
■ハイデラバード　12月25日・26日

ホテル名：Le Meridien New Hyderabad

住　　所：Plot No 132 Miyapur Road, Gachibowli Hyderabad 500032, INDIA

電　　話：+91-040-42865550

日時：2024年12月23日（月）10：00~12：00
訪問先：スズキ・モーター・グジャラート
目的：インドで圧倒的なシェアを誇るスズキ株式会社（以下、スズキ）の四輪生産会社 スズキ・モーター・グジャラートの工場を視察し、インド進出における課題やインド人従業員の教育などについて把握する。

【要旨】
・空港から約100キロ、車で2時間強のところに立地。近くに港が3つあり、当工場が輸出の拠点となっている。高速鉄道新幹線で、アーメダバードからムンバイまで結ぶというプロジェクトも今進めているところ。
・敷地面積300万㎡の中に260万㎡の工場があり、スズキでも最大級の工場。
・北側にサプライヤーパークがあり、約10社の子会社、工場がある。TDSDという東芝、デンソー、スズキの合弁会社では、ハイブリッドカーの電池を製造。
・B工場は2018年、C工場は2021年4月に生産開始。ABCの3工場で75万台を生産。そのうち約20%が輸出用。
・順調に生産が伸びているが、2020年度にコロナの影響で約40万5000台から36万5000台と一度だけ下がった。インドでも2か月間ロックダウンとなり、全く生産ができなかった。
・2023年12月に累計生産300万台を達成。2023年は82万5000台を生産。2024年度も80万台以上の生産を見込んでいる。

・A工場では、日本では販売していないバレードという車を造っている。トヨタにOEMとしてグラウンドという名前で供給。
・B工場では、日本でも生産販売しているスイフトを生産。一部、フロンクスも生産。
・C工場は、フロンクスを生産。そしてトヨタ向けに同じくアーバンクルーザータイガーという形でOEM供給している。日本向けのフロンクスは全てこのC工場で生産。
・工場内には、バンパーインパネの樹脂成形や塗装、エンジンの鋳造加工や組み立て、トランスミッションも加工や組み立てと、全部一貫で行なっている。

・工程は、プレス→塗装→組立→完成組立の順。プレスや溶接は完全自動化となっており、ロボットが100%行ってくれる。
・プレス工程
車のボンネット、屋根など外観にかかる部分を大型のプレス機で生産。加工したものはパレットに載せられ、フォークリフトで運ぶ。フロンクスのサイドボディ部分を5秒に1枚の速さで生産する。
・溶接
プレス工程で造られたフロンクスのサイドボディやルーフパネルを溶接し、メインボディラインで全ての溶接を行う。FANUCの機械で全自動化されている。ドアパネルをプレスで膨らませる工程を経て、最終的にドアパネルをボディに取り付けて完成。
・組立工場
ファイナルラインは車両に不具合がないか、傷や凹みがないかを確認する。完成検査ラインでは、ドラムテスター(モニターに指定されたパターン)で走行を確認したり、車両重量、悪路走行等を確認する。

・1日約3000台を生産し、約1週間分となる最大23,000台の完成車両を敷地内に置くことが可能。その内の3分の1を鉄道レーンで出荷。
・鉄道レーンの出荷量は、2023年3月～2024年11月までで約37万台。27貨車にそれぞれ10台積込み、1車両270台を、3～4両編成/日(800-1000台)で出荷。カーボンニュートラルの目的で、鉄道出荷を2030年に約35%まで引き上げたい意向だが、貨車の生産が間に合っていない。

【鈴木俊宏　スズキ自動車代表取締役社長　挨拶】
スズキ・モーター・グジャラート(以下、SMG)のB工場は2017年の2月に創業し、6年11ヶ月の期間をかけ2023年12月にスズキの工場で最速となる早さで300万台の生産を達成した。現在、累計で380万台を生産。
この工場は従来のグルガオン、マネサールと変わって、スズキが出資して作り上げた工場。技術者あるいは工場の指導員を派遣して、もう1回原点に立って工場作り直そうということ、そしてマルチスズキの工場と切磋琢磨して競争するということで立ち上げた。
皆さんがここに来るまでの道中に見ての通り、何にもなかった。草原というより荒野。もう何にもない状況でのスタートだった。今でこそ舗装された道があるが、この工場建設に携わった人たちは本当に何にもないところで、アーメダバードからぬかるんだ道、砂利道、そういうような道を本当に3時間かけて通勤してここを立ち上げた。病院や学校などをマルチスズキが寄付したが、そういうもの何にもないという環境で立ち上げた工場であり、駐在員が本当に大変な努力してくれたなと思っている。今でも多少不便ではあるが、この近郊に住みながら、寮にも入りながらということで日々の生産を支えている。

短い時間だが、今日工場見ていただいて色々気づかれたこと、我々が見慣れて気づかないところ等、コメントいただけたら有り難い。

【鈴木康友　静岡県知事　挨拶】

鈴木俊宏社長はじめスズキの皆様には、快くお迎えをいただいたことに感謝する。

スズキは1980年代前半に、まだほとんど日本企業が進出していなかったインドに進出をし、大変なご苦労を重ねる中で、今や圧倒的なシェアとプレゼンスをこのインドで確立をされた。

今回、グジャラート州と静岡県との連携協定についても大変ご支援をいただきましたことを改めて熱く御礼を申し上げたい。

10数年前にインドに来た時にスズキの相談役からお誘いいただき、工場を見学した。その際も直線1キロの生産ラインをみて圧倒されたが、それを凌駕するこの巨大な工場を見て、改めてスズキのこのインドにおけるプレゼンスの高さを感じた。

今年1月に社長がさらに100万台増産をする工場をグジャラート州政府と協定を結んだということであり、2030年までに400万台の生産目標を掲げたということは本当にすごい。これからアフリカや中南米等、広い市場に向けてこのインドが拠点になっていくんだろうと思う。また、この自動車生産だけではなくて、最近Next Bharat Bentureを作られ、スタートアップの育成や連携も始められたり、3億トンの牛の糞を使ってバイオ燃料を作ろうとするなど、意欲的な取り組みも始まっている。まさにインドの社会課題をビジネスで解決をしていく、その新たな領域に入られたのではないか。これからグジャラートと経済、教育、文化、観光など様々な分野で包括連携をしていこうという静岡県にとっても大きなチャンスをいただいていると思っている。今後もスズキとしっかり連携をしながら静岡県全体の発展に向けて連携を強化していきたい。

スズキ、そして関係者の皆様のさらなるご繁栄、発展を祈念し、挨拶とさせていただく。

【杉山盛雄　静岡県議会団長　挨拶】

鈴木俊宏社長にはこのような視察を受け入れていただき、また関係各位には改めて心から感謝を申し上げたい。

2年以上前から[redacted]と私は毎年、年に数回2人きりで食事をするが、インドと静岡県の友好提携を結びたいと言ったら、それはいいことだ、と非常に喜んでくれて今日に至っている。

グジャラート州との様々な経済との友好提携を実現できたのも、新たな鈴木知事になってからということも感じている。これからのインドに大きな期待を持って、日本と同時に日本と同じように発展をできればと感じている。40年以上前の風景を見ながら、このようにインドに根を張ってインドを1つの拠点として日本一、世界一のスズキにしたということは本当に先見の明があるということを改めて感じた。

ぜひこれからもスズキの皆さん方と、そして静岡県とグジャラートの友好提携をしっかりと行い、ますます日本とインドがお互いに発展できることを私自身も改めて努力することを誓いたい。

【中野祐介　浜松市長　挨拶】

本日はスズキモーターグジャラート、スズキのインド工場を見学をさせていただくという大変貴重な機会をいただいた。鈴木俊宏社長をはじめ皆様方に感謝する。

昨晩インドに到着したばかりだが、改めてこのインドの成長、発展著しいインドの活気、活力、そういったものを強く感じた次第。

今回、そういったインドの経済交流、人的交流、これをより一層深めようということでお邪魔した。この一層の協力関係の構築、深化、これが我々浜松にとっても静岡県にとっても、また日本、インド両国にとっても大いに意味のある、役に立つことではないかと深く感じた。

日印交流のまさにパイオニアとして40年以上前からこの地でご活躍をされているスズキの最新鋭の工場、これを視察させていただくということは、日印交流を深化させるにあたっての成功の秘訣を学べるのではないかと非常に期待をしているところ。

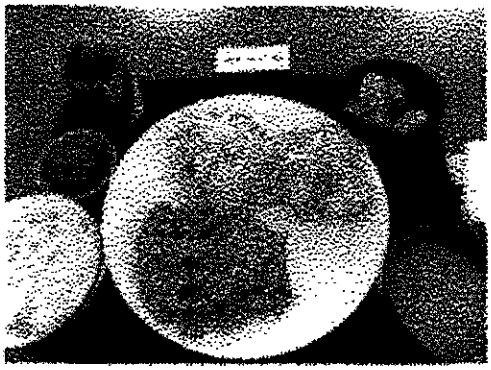
先日、日本でも発売されたばかりで、浜松駅の新幹線のコンコースにも飾ってあるフロンクス、その全量をこの工場で生産をされていると聞いている。スズキの世界戦略の最新鋭、最先端を見させていただけるものと大変期待をしている。改めて我々を受け入れていただいたことに深く感謝を申し上げるとともに、ぜひいろんなものを得て日本へ帰りたい。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

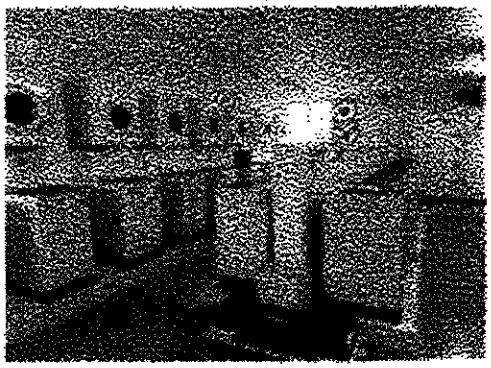
【所感】

グジャラート中心部から車で約2時間30分かけて当地まで来たが、工場の周辺は何もない荒地。40年前にこの何もない地に先見の名を見出したこと、そして今やこの地に日本と同品質かつ最先端のテクノロジーを活用した中で車両が生産されていることに驚く。工場内は綺麗で清潔そのもの。日本人のマナーをインド人に理解してもらうため、「ポケテハナシ」という工場内のルールを定めている。ポは、ポケットに手を入れない。ケは、携帯を見ながら歩かない。テは、手すりを使って階段を登る。ハは、走らない。ナは、斜め横断の禁止。シは、指差し呼称を徹底することだ。他にも、トイレの中にも張り紙がしてあり、マナーの周知がされていた。こういった社員教育が日本と同等の品質を実現できている要因だろう。また、他工場との差別化の一つとして、トラックをそれぞれの工程の真横で荷下ろしをすることができるよう環境が工夫されていた。これによってフォークリフトを使って運ぶ必要がなくなり、省人化及びスピード感をもって必要な部品を必要な工程のところに届けることが可能だ。FANUCのロボットによる自動化然り、日本のテクノロジー技術や工夫が散りばめられた工場だと感じた。

工場を視察後、スズキ・モーター・グジャラートの社員寮で昼食をいただいた。ここでも

日本品質は然りで、インドでは推奨されない生野菜もここでは安心して食べることができた。社員寮のレストランのトップは日本人が務めており、日本と同じ味で安心して日本食を食べることができるのは駐在する日本人にとっても喜ばしいことだろう。
スズキのインドにおける自動車のシェアは 41.7%（2024 年 5 月時点）。シェア 50%以上奪還に向け、工場新設など今後さらに投資を加速していく予定だ。インドには欠かせないスズキ自動車の助力を得ながら、多くのインド人材が浜松で活躍できるようパートナーシップの構築と環境整備を模索していきたい。







日時：2024年12月23日（月）13：30～14：30
訪問先：マンダル工業団地（豊通インディア社）
Toyotsu Bharat Intergrated services PVT.LTD.（以下、TBIS）
目的：静岡県の企業も入居するマンダル工業団地において、豊田通商インディア社が運営するテクノパークを視察し、インドへ進出するメリットや課題等の現地ビジネス環境や企業のさらなるインド展開の可能性を模索する。

【要旨】
豊田通商インディア社
・本社はバンガロール。インド全体で複数拠点持っている。1999年に駐在事務所としてはじめ、25年が経った。
・現在、グループ会社を入れて24社、社員数で1万人弱ぐらい、駐在員60名程度の規模で運営。
・大きな柱としての事業は3つ。1つは、インドにおけるモビリティの発展。2つ目が、交通渋滞、交通事故、大気汚染等々、社会的な課題解決の事業。3つ目は、インドを起点とした中東やアフリカへの架け橋をつくること。インドは歴史的に見ても東西の結節点とも言われている。
・マルチスズキと合弁会社にて自動車廃車のリサイクル事業を行なっている。まだ1拠点ではあるが、インド全州に拠点を広げるべく行なっている。法律的なところが大きいが、リサイクルを通じて資源の有効活用ならびにサーキュラエコノミー、そしてカーボンニュートラルに貢献するという目的のもとに進めている。2つ目は再エネの取り組み。まだまだインドでは遅れているが、非常にチャンスがあり、可能性が高いものと考えている。
・セコムと合弁で総合病院をバンガロールで運営している。まずは駐在員の方の生活の基盤になるような事業ということで始めたが、実は患者の99%が現地のインドの方が利用している総合病院。社会基盤のこの地元への貢献ということで、今はまだバンガロールだけだが、こういった事業モデルを今後も広めていきたいと考えている。
・TBISは、豊田通商インディアの子会社。
・豊田通商インディアの全ての事業をテクノパークで行なっていると言っても良い。スズキを主とするモビリティ事業への貢献、当社日本式ものづくり学校を通じた地域人材育成の貢献、また、部品メーカーの支援によるものづくりサプライチェーンへの貢献を行なっている。
・TBISは、既存の3社を統合し、昨年6月にTBISとして新たに操業を開始した。テクノパーク事業とそれからロジスティック事業に加え、今後はものづくり分野にもチャレンジしていきたい。
・現在、インド内で4つのテクノパークを運営。立地の良さから、レンタル工場に入っている企業の中には、将来アフリカへの輸出を目論む企業もいる。企業はこういったところにメ

リットを感じ、注目している。過去の実績として、レンタル工場を活用し、最短6ヶ月で創業開始されたケースがある。
・インド進出の課題は3つ。用地取得ハードルの高さ、優秀な人材の確保の難しさ、法制部への対応等。
・まず、用地取得に関する課題は大きく3つある。慢性的な工業団地不足、複雑かつ不透明な制度・手続き、そして州政府の理解・協力。
・このスキームをプラグ&プレイということで案内しており、お客様が本業のものづくりに専念できるよう、支援している。これは土地建物の取得や電力・水の確保、許認可取得支援、工場周辺サービス等を整備し、「コンセントをつなぐだけで簡単に操業できる環境や、サービス」を提供可能とするもの。進出する企業のメリットとしては、進出期間を短縮可能とするだけでなく、インフラ等の初期投資を削減できる。また、日本式ものづくり学校を設置し、人材育成の面でもサポートしている。
・工場タイプとしては、大きく2つあり、1つはいわゆる賃貸マンションの形で必要なスペースを活用いただくレンタル型。もう一方が、入居企業様の使用に基づいて、いわば注文住宅のような形でTBISが工場を建設していくオーダーメード型の2通り。
・レンタル工場は2棟あり。2000-3000㎡を一つの建物としている。日印の工業団地の一部を豊通が担い、その大きな枠をプロット（小分け）して中堅企業に貸し出している。レンタル工場に関しては、現在満床。
・現在、3棟目を建設することを検討中。

・オーダーメイドはフェーズ1、2、3と3つある。3か所合計で約10万㎡の空き地があるが、現在一部商談を進めている状況。
・人材確保について、ホワイトカラー、ブルーカラー、各々の重視すべき課題として就業環境の整備がある。通勤手段の確保、食堂、福利厚生など、基本的な設備の完備が必要。
・TBISでは、入居企業様にもご利用いただける食堂管理、医務室、安全教育を受けたドライバーによる通勤バスの提供等を提供している。

・人材育成の面では、（豊田通商インディアが運営主体となるが、）日本式ものづくり学校を敷地内に設置。
・インド全土で60年以上の技術分野の教育をしているNTTFと連携して3年間のプログラムを提供しており、地域の若年層と日系企業をつなぐ役割を果たしている。また、学生が将来の就業に有利になるように、提携先のグジャラート工科大学よりですね、ディプロマを発行してもらう工夫もしている。
・採用プロセスにおいては当初100名程度から最終20名～30名に絞り込み、人材を選抜していく。
・クラスルームでは、ものづくりに必要な基礎教育、Excel、CAD等のPCスキル、さらに

は工作機械等の取り扱いをOJTで学べる施設となっている。
・成績や企業とのマッチングで採用に繋げていく仕組み。学生の費用は無償で、協賛企業の負担で給与が発生。これまで4期生まで計61名が卒業。そのうち、45名が日系企業に勤務している。
・当校としては、安全品質と日本式ものづくり、この考え方を指導し、将来的に現場のリーダーとなり後続を指導できる、こういった人材の育成を目指している。
・この地域は他地域と比べると多くはないが、過去をさかのぼると暴動がそこそこ発生している。そこで、テクノパークの入居企業様含め、日系工業団地での日系企業代表者が約9社いるが、JETROの音頭で定期的に集まり、マネジメントの視点で課題やその解決の方向性の協議、そして相互アドバイスできる環境を構築している。
・今後は当工業団地のさらなる活性化を目指して、インド人も含めたスポーツフェスティバル等を開催し、交流、連携を促進させていきたい。



【所感】

広大なインドで工業用地が足りていないのは、農地から工業用地に変更しようとすると農村部からの猛反対にあうことも理由のようだ。

世界の経済大国第2位に躍り出た中国は、第一次産業から第二次産業、第三次産業へと順調に変化していったのに対し、インドでは、名目GDPでは第一次産業から第三次産業への産業構造の変化が起きているものの、就業構造の変化は追いついていない。インドの経済状況を考えると第一次産業と第二次産業の比重がもう少し高いはずだが、IT産業の発展により第三次産業の比重が非常に高くなっている。この背景には、カースト制度というインドの歴史と、農村地域における教育水準の低さがあり、農業セクターから資本・知識集約型セクターへの移動が限られていることが挙げられると推察する。インド政府としても工業用地を急激には広げられないだろう。

そのような環境の中で、TBISのような事業を行っている企業は重要だ。インドの人口やGDPの成長率を鑑みても、インドでビジネスを展開・参入を模索している日本企業は少なくないだろう。今回視察したTBISの建売の土地はまだ10万㎡ぐらいが余っているが、スズキ関連のサプライヤーが来てくれることを望んでいる、とTBISの代表は話していた。浜松の企業がインドへ活躍できる環境を、本市もインドの関係機関とともに模索していく必要があると感じた。

日時：2024年12月23日（月）17：00～21：00
訪問先：グジャラート国際金融都市（GIFT CITY）内、GIFT CITY CLUB
目的：Next Billion FORUM に参加するとともに Next Bharat Ventures IFSC Private Ltd.の社会起業家支援の状況を把握し、本市との企業間の連携を模索する。

【要旨】
GIFT シティ
・ナレンドラ・モディ首相によって構想された金融センターは、インドで最も先進的なスマートシティ。
・土地面積 3,300 エーカーの中に、国内関税地域 625 エーカー、特別経済区 261 エーカー、計 886 エーカーが存在。
・アーメダバード国際空港から 20 分、新幹線ターミナルから 15 分の立地。
・最先端の AWCS（自動廃棄物収集システム）や電力などのインフラに加え、あらゆる外貨での取引が許可された IFSC（国際金融サービスセンター）などが整備されている。
・スマートオフィス、住居、病院など、現在 30 程度の建物を建設中。
・2024 年 10 月までの IFSC の実績として、134 のファンド運用機関が登録し、銀行資産総額は 710 億ドル以上、累積銀行取引額は 1 兆 140 億ドル以上など。
・10 年間の免税や運用コストの低さ、優秀な人材が揃っているなど、様々なメリットがある。

インド側発言要旨
・インドが 2047 年までに先進国になるためには、日本の生産管理の考え方など日本の協力が不可欠。
・インドは輸出国となる必要があり、税制の整備、インフラの整備、技術、人材育成などを整備する必要がある。
・雇用、生産能力の向上、経済、イノベーションの促進など、スズキがインドで果たした役割は大きい。
・インドの女性たちを組織化すること、そしてミクロ企業にして女性たちが取り組むことが必要。デジタル決済もスピーディに可能。おかげで 90%の女性が口座を持つことができた。インドでは 80%の人がデジタル決済で完了できる。
・必要なのは資本。何万人の貧困を救うためには大企業ではなくミクロ企業や零細企業、女性たちへ投資を振り分ける必要がある。
・40 年前にスズキは全てにおいて遅れていたインドへ投資した。この大きなリスクを冒してでもインドに来てくれたスズキに感謝しているし、日本の企業にもリスクを背負ってどんどんインドへ進出してほしい。
スズキはインドに新しい価値観をもたらしてくれた。スズキはインドの家族。感謝している。

・Next Bharat の実績例として、羊から得た羊毛を住宅用の断熱材に変えたことで収入を 3 倍に増やすことが出来た。こうした社会起業家に資金とリソースを提供し、インパクト起業家を支援している。

【Next Bharat 挨拶】

40 年以上インドでビジネスをさせていただいている。お客様、お取引先様を含め約 4 億人の方々と関わらせていただいているが、総人口 14 億人のうち、まだ 10 億人の方々と関わってないというのが現状。これから次の 10 億人と呼ばれる Next Billion の方々と関わり、インドのさらなる経済成長の発展に貢献していきたいと考え、Next Bharat を立ち上げた。

そもそも次の 10 億人というものは何かということだが、例えば税金を納めており、オフィスで働いているような方々を India1、トゥクトゥクのドライバーやストリートで食べ物を販売しているようなインフォーマルセクターの方々を India2、そして農村部に住んでいて農業に関わっているような方々を India3 と区分けしている。Next Bharat は、この India2、India3 にフォーカスして、彼らの収入を上げるようなビジネスをしている起業家を支援していく。

では、どのように次の 10 億人の人たちに価値を創出できるのか。次の 10 億人の人たちは、例えば農作物の価格変動、金融へのアクセスといった多数の課題に直面している。こういった課題に対して、インド各地で問題を解決するためにビジネスを展開しているインパクト起業家と呼ばれる人々がいることがわかってきた。こういったインパクト起業家の人たちを支援していくことによって、この次の 10 億人の人々に対する価値を最大化させることができると考えている。

インパクト起業家の例を挙げる。

1 人目は[redacted]さん。この方は、オディサ州のコットン農家の人々が貧困で苦しんでいる、低収入によって苦しんでいるという現実を目の当たりにして、ヤギを商材としたビジネスを展開することによって、コットン農家の人々にとって新たな収入を創出できるようビジネスを展開している。

2 人目の[redacted]さん。ラジャスターンの砂漠地帯において羊を牧畜しているコミュニティの人たちにとって羊毛というものが、価値のあるものになっていなかったが、[redacted]さんのビジネスによって、その羊毛から新たな建築用の断熱材を商品化することによって、新たな羊毛の価値を生み出している。

このように次の 10 億人の方々の課題を、ビジネスを通して解決し、価値を創出しているインパクト起業家を私たちは支援していきたい。

私たちは、インドにいるインパクト企業家 100 人以上にインタビューをし、現在彼らが享受できる支援において何が欠けているかを調査した。その結果、大きく 3 つのギャップがあることがわかった。

1 つ目は、エージェントキャピタルの役割。インパクト起業家のビジネスは、ゆっくりで

はあるものの着実な成長を進めるようなビジネス体系が多いのに対し、従来の投資機関は急成長できるスタートアップを求めており、このような技術体系のインパクト起業家に投資できる機関が不足している。

2つ目は、インドにおいてインパクト起業家のためのコミュニティがないこと。すでにインドではTechスタートアップのコミュニティがあり、このビジネスのTechスタートアップの起業家はお互いに繋がり、ビジネスノウハウやネットワークなど、助け合いながらそれぞれのビジネスを成長させる好循環なコミュニティができている。一方で、インパクト起業家はインド中、津々浦々に散らばっていて、1つのコミュニティがなく、それぞれが孤立してしまっているのが現状。

3つ目は、インパクト起業家は無名のスタートアップであるため、ビジネスを成長させるための鍵となる外部のネットワークが乏しく、特に国外のネットワークのつながりがほぼないというのが現状。

インパクト起業家がより早く、そして着実にビジネスを成長させ、次の10億人の方々に還元することができるよう、これらの問題を解決するための活動を行っている。その活動の一部を紹介する。

1つは、4ヶ月間のインパクト起業家支援プログラムを通じて、インパクトと起業家のコミュニティの構築や投資などの機会を促進することを目指している。

次に、スズキイノベーションセンターでの活動として、Next Bharatのシンクタンクとしてインパクト起業家が必要とする情報やネットワークを提供することを目指している。

最後にジャパンシナジーについて、日印協業による次のNext Billionへの新たな価値創造と日本企業へインドにおけるビジネス機会の理解と新市場の共同創造の場の提供も目指している。

今後もこのような活動を通じて、また皆様のご意見やアイデアをお聞かせいただきながら、インドのさらなる発展に貢献していきたい。

【鈴木康友　静岡県知事　挨拶】

スズキの次への挑戦として強烈な印象を受けた。このスズキの新たなチャレンジ、挑戦は、これからのグジャラート州と静岡県の連携にとっても大きな意味を持つだろう。

私は静岡県知事に就任する前、16年間浜松市長を務めていた。中でも特に力を入れて取り組んだのがスタートアップ、いわゆるベンチャー企業の育成・誘致。

なぜスタートアップなのか。それには大きく2つの意味がある。1つは、世界的に見てスタートアップが集積している地域は経済が成長していくこと。

2つ目は、スタートアップが今、社会課題を解決のために大変重要な存在であるということ。社会課題が複雑をしていく時代の中で、行政だけではなかなか対応しきれない。課題解決能力のあるスタートアップと連携をするということは、これからの自治体行政にとって大変重要な取り組みだと思っている。私が16年で培った経験を、これから静岡県知事とし

て静岡全体の発展のために活用していきたい。特に私が力を入れていきたいことは、 世界のスタートアップとつながること。

明日、パテル州政府首相と協定を締結する。この協定の中にはスタートアップの交流という大変重要なファクターが入っている。グジャラート州あるいはインドの素晴らしいスタートアップ企業に静岡県へ来ていただく。そして、静岡県の素晴らしいスタートアップにグジャラート州へ行っていただき、新たなビジネスチャンスを掴む、あるいはグジャラート州の社会課題の解決に貢献をする、そういう交流をしていきたい。そうした中、今回スズキが新たに課題解決に力を入れるスタートアップ、インパクト起業家を支援していくということは、我々にとっても大変心強いメッセージだと感じる。これからスズキとともにグジャラート州と静岡県の素晴らしい交流を深化させていきたい。

今日ここにお集まりの皆様にも一層のご理解とご支援を心からお願いしたい。

【杉山盛雄　静岡県議会団長　挨拶】

本日はご多忙にも関わらず、私たちのために丁寧な説明を賜り、心から感謝を申し上げる。静岡県には富士山があり、そして何よりスズキ自動車の本社がある。本日は、この静岡県を代表し、インドの国内でも先進的な地域である GIFT シティを訪問できたことを大変嬉しく思う。

この GIFT シティは、インドにおける金融、またテクノロジーの中心地として急速に発展をしており、その先進的な取り組みやビジネス環境は、私たち静岡県にとっても大変に参考になった。

特に、外貨での資金調達、また法人税の免除といった優遇に加え、Fintech 分野を中心に、有望なスタートアップ企業の育成支援に力を入れていくことに成長のヒントがあると深く感じた。また、皆様の並々ならぬ意欲を肌で感じることができ、私たちも大いに刺激を受けたところ。今回の訪問が、静岡県とグジャラート州の交流を深め、相互理解を促進するような重要な機会になることを心から期待している。

私は、2 年以上前から[redacted]とこの機会を作ることをずっと相談をしてきた。今日これが実現をし、明日いよいよグジャラート州と調印ができることを本当に心から嬉しく思っている。私たちの地域には伊豆半島もあり、温泉と観光に非常に力を入れている。インドの皆様にも心より歓迎をいたしますので、ぜひお越しください。

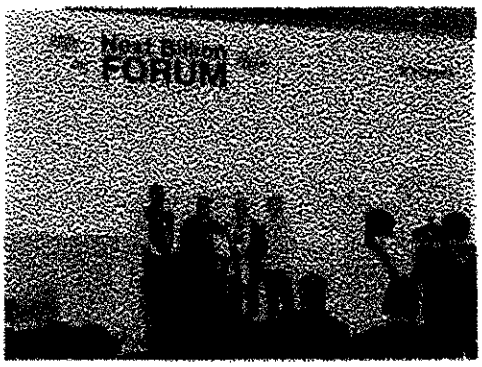
最後に、このような貴重な機会を与えてくださった関係の皆様に改めて感謝を申し上げるとともに、今後の交流が実り多きものになることを心より祈念する。

【中野祐介　浜松市長　挨拶】

本日は Next Billion Forum に多くの皆様のご参加のもと、盛大に開催されましたことを心からお祝いを申し上げる。また、静岡県、浜松市訪問団が参加させていただいたことに熱く感謝を申し上げる。

昨晩、インドへ入国し、世界でも有数の発展を遂げるインドの活気、活力を肌で感じているところ。GIFT シティも、Fintech をはじめとする新しい時代の世界金融をリードする地域であると感じた。

日本は戦後、奇跡的な成長を遂げたという風に言われているが、それは単に利益を追求するだけでなく、社会課題の解決を合わせて行ってきたことで今の日本の発展はあると思っている。世界の経済大国の一角となったインド、単に成長遂げているだけではなく、社会課題の解決を目指して新たな企業の参入、これがここからスタートする、これは非常に意味がある。Next Bharat Ventures がこれから素晴らしい活動をされるだろうが、スズキ株式会社の果たす役割が非常に大きいものがあるだろう。浜松市としても、その活動に少しでも貢献できるよう、また連携が取れるようにこれから様々な取り組みを進めていきたい。これからの活動によって、インドのさらなる発展がもたらされること、そして世界全体の繁栄につながることを祈っている。





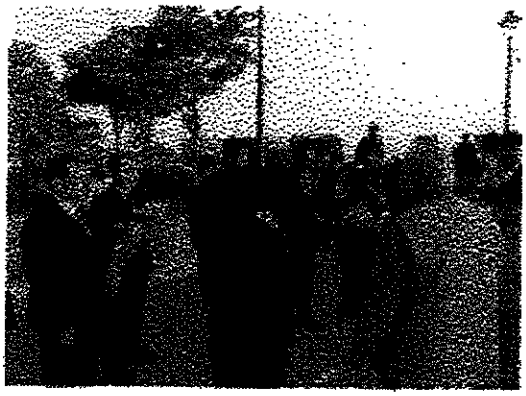
【所感】

2047 年までに先進国になることを目標としているインド。この目標を達成するためには次の 10 億人と呼ばれる Next Billion の方々が活躍できる社会を作っていくことが重要だ。トゥクトゥクのドライバーやストリートで食べ物を販売しているようなインフォーマルセクターの方々である India2、農村部に住んでいて農業に関わっているような方々である India3 の層を、どのように India 1 に底上げしていくかが成否を分けるだろう。スズキが立ち上げた Next Bharat 社は、まさにこの India2、India3 にフォーカスして、彼らの収入を上げるようなビジネスをしている起業家を支援しているため、インド政府にとっても、そしてインド国民にとっても恩恵のある魅力的なビジネスだ。

GIFT シティは、Fintech をはじめとする新しい時代の世界金融をリードする地域であり、ここで今回の Forum が開催されたことも意義深い。Next Bharat 社の方に話を聞くと、社会課題があるからこそ、そこにビジネスチャンスがあると熱く語っていた。インドにとって、新しい金融の在り方とそこに社会起業家を支援していきながらビジネスを拡大させていくという新しい取り組みが、今後のインドにとって大きな役割を果たすものと感じた。

日時：2024年12月24日（火）9：00～10：00
訪問先：アーメダバード市役所
目的：アーメダバード市と市民レベルでの友好関係を構築するため、文化的な交流だけでなく、スポーツや教育等、多分野での交流の可能性を模索する。

【概要】
・2023年の人口は約800万人で世界第270位、インド国内では第7位。
・アーメダバード市は農業や綿織物が盛ん。カイト（凧）を揚げる文化があり、毎年1月14日には一大イベントが開催される。
・今後、浜松市と文化面等での協力関係を構築していくことの覚書を締結することにアーメダバード市長も賛意を示した。





【所感】
やや短い時間であったものの、アーメダバード市長への表敬訪問し、アーメダバード市長は我々を温かく歓迎してくれた。残念ながら今回はインド政府の承認が間に合わず、アーメダバード市との覚書締結はできなかったものの、アーメダバード市も本市との覚書締結について歓迎ムードであり、本市との友好関係や協力関係の構築に期待をしていることが伝わった。会談では、人材交流や産業交流に加え、凧（カイト）の交流など文化的交流を実施していくことで合意した。お互いに凧揚げの文化もあり、今後の両市の協力関係に期待するとともに、私も協力を惜しまずにこの枠組みに参画していきたい。

日時：2024年12月24日（火）11：00～14：00
訪問先：グジャラート州政府
目的：グジャラート州政府と強固な関係を築くため、同州政府を訪問し、友好協定を締結する。



【有吉孝史　在インド日本国大使館次席公使　挨拶要旨】
・グジャラート州には、日本企業が40社進出している。その最大手がスズキ自動車。
・ジェトロがイベントを開催し、日本企業の進出をサポートしている。
・東京エレクトロンとタタエレクトロンもMOUを締結した。
・グジャラート州は貨物線も発展してきている。
・二カ国間の発展、静岡県とグジャラート州のパートナーシップが発展することを願っている。

【中野祐介　浜松市長　挨拶】
本日は、グジャラート静岡パートナーシップデイに日印両国の多くの皆様ご参加のもとで盛大に開催されますことを心からお祝いを申し上げる。また、ルペンドラパテル州政府首相閣下をはじめ、グジャラート州の皆様には、我々、静岡県、浜松市の訪問団を温かく受け入れていただきましたことに心から感謝を申し上げる次第。我々は一昨日インドに入国した。成長、発展著しいインドの中でも、最も開発が進んでいる地域の1つであるグジャラート州の規模感に圧倒されている。これからさらに飛躍をする、そんなポテンシャルを持ち合わせている国であるということも実感したところ。
先ほど、アーメダバード市長を表敬訪問させていただいた。今後の交流、協力について、大変有意義な有益な対話をさせていただいた。グジャラート州におかれては静岡県と連携を進めるべく、本日調印がなされる。グジャラート州、アーメダバード市、そして静岡県と浜松市が連携をして友好関係を築いていける、そのような関係を作っていただければと思っている。
浜松市では、インド国籍の市内移住者が年々増えている状況。インドからの留学生が増える、またインド国籍の方々の雇用が増える、そしてその一方で、我々浜松市からインドへ進

出を考えている、そのような企業もたくさん現れてきている。このように人材交流、経済交流がより一層進んでいる中にあり、官民ともにインドとの連携、これを一層高めようという機運が高まっているところ。

浜松市には、スズキの本社も所在するということで、インドの方々も一度は耳にしたことがある都市ではないか。浜松市は製造業を中心に日本の発展、成長を牽引してきた地域。一方で、グジャラート州は成長、発展著しいインドを牽引する、工業の観点から浜松市とも非常に似ているという風に思っている。

今回の訪問を契機として、より一層関係が深まり、その連携協力関係が両地域の、また両国の持続的な発展につながることを期待している。本日は、両国の両地域の新しい歴史の1ページを開く、そんな1日になればと願っている。

【鈴木俊宏　スズキ自動車代表取締役社長　挨拶】

グジャラート州のブペンドラパテル州政府首相閣下、静岡県知事、アーメダバード市長、浜松市長並びにご臨席の皆様に心より敬意を表する。

スズキは静岡県浜松市で創業した。そして、インドでの長い旅を経て、グジャラート州という新たな故郷にたどり着いた。グジャラート州はスズキにとっても世界へのゲートウェイになっている。

2017年2月にグジャラートで操業を開始して、6年11カ月後の2023年12月には累計で300万台の生産を達成し、スズキの生産拠点として最速の成長を続けている。

スズキ、東芝、DENSOによるリチウムイオンバッテリー製造拠点は、グジャラートへの技術移転を進め、環境車の普及を促進している。また、スズキは、その国や地域に合ったマルチパスウェイの一環で、酪農のプロフェッショナルと協力し、インド政府が目指す牛からのCBG（圧縮バイオメタンガス）事業に参画した。代替燃料の促進、メタンガスの削減と農家の人々の収益向上にも貢献していく。

Made in グジャラートのフロンクスは67カ国へ輸出している。今年10月には日本で発売し、現在納車7か月待ちとなって大好評を得ており、来年には欧州や日本などへのBEV車を輸出する計画。

ところで、工場のある地域には10店以上もの日本料理レストランも比較的多く営業している。グジャラートは日本人にとって住みやすい町になりつつある。

グジャラートへの投資が地域にどのようなポジティブなインパクトを与えたか、インド工科大学アーメダバード校とインド農村経営大学が調査を行った。政府の投資や支援、スズキの事業、マルチスズキが支援する病院と学校の建設や運営などの相乗効果により、87%の方々が生活水準の向上を体感されている。

医療環境についても77%の方々が、また教育環境については67%の方々が良くなったと実感していただいている。学術的にも弊社の事業がグジャラートの発展につながっている評価をいただき大変光栄。

最後に、今後の取り組みについて申し上げる。すでに発表済みではあるが、新たに100万台規模の工場を建設する。また、2022年のスズキのインド進出40周年式典において、この会場で発表したスズキR&D Center India Private Limitedが、この度、IACEとの間で覚書を締結し、小さくたくましい電動台車でViksit Bharat目標に貢献いたします。これをモビリティインフラとしてインドのスタートアップと協力し、その先にある農家、工場、物流の効率化を支援する。さらに、スズキはアーメダバード経営者協会と協力し、1980年以降、インドの労働文化を変えたとお言葉をいただいている日本式の経営やスズキの考え方についてセミナーや研修を行い、人材育成のお手伝いを始める。

改めて、本日のイベントに招待いただいたことに感謝をすると同時に、今後のグジャラート静岡県、アーメダバードと浜松の長期にわたる友好関係を記念して、私のご挨拶とさせていただく。

【杉山盛雄　静岡県議会団長　挨拶】

グジャラート州は、豊かな文化を持ちつつも、先進的な取り組み、それによってインド国内で最も工業化が進展している大変に注目すべき地域と認識。

本日は静岡県議会を代表し、本県の有力企業であるスズキ株式会社との関係の深いこのグジャラート州を訪問できたことを大変嬉しく思う。

静岡県議会としては、先日、静岡県と海外の地方公共団体との友好交流に関する条例に基づき、インド共和国グジャラート州との友好協定の締結に満場一致で賛成する議決を行ったところ。

私たちの訪問が静岡県とグジャラート州との友好関係を深め、さらなる交流と協力を促進するための重要な機会になる。このことを心から願っている。また、今回の訪問ではインド初の国際金融経済特区であるGIFTシティ、またインド初の高速鉄道現場の視察をさせていただき、温かい歓迎を受けるとともに、力強い発展を間の当たりにし、深く感銘を受けた次第。この感銘を日本に持ち帰り、本県の産業振興に役立てていきたい。

グジャラート州との友好関係を深めることで、経済や文化の交流を促進し、お互いの発展に寄与できると確信をしている。今後のさらなる交流と、皆様の健康と益々のご活躍を祈念する。

【鈴木康友　静岡県知事　挨拶】

本日は、グジャラート州と静岡県、そして浜松市とアーメダバードをはじめとする友好交流のパートナーシップデイが盛大に開催されることを本当に嬉しく思う。パテルグジャラート州首相はじめ、グジャラードの皆様には訪問団を歓迎いただいたことに、心から熱く御礼を申し上げる。今日の協定に至るまでには長い歴史があった。

紐解けば、1982年にスズキ株式会社がこのインドへ進出したことが始まりであったという風に思う。当時、アメリカやヨーロッパへ進出することはあってもインドへ進出をした。

それを成し遂げたのは[redacted]。私も長い付き合いになるが、素晴らしい経営者であり、ものすごい強運の持ち主でもある。先ほどインドの方とお話をしていたら、インドの皆さんもこの運というのはすごく大事にしているという風に伺った。運の強さと、もう 1 つ大事なことは絶対に決めたらやり遂げる、その強い意思と実行力。私のもう 1 人の師匠であるパナソニックを創業した松下幸之助翁は、やはり 成功するまでやり続けることが大事だと仰っていた。偉大な経営者はやはり共通した思いを持っている。

松下翁は、成功の要点は成功するまで続けるところにあるとおっしゃった。まさにそれを実践されたのが[redacted]だと思う。

色々お話を聞くと、進出した頃はもう大変なご苦労があったという風に伺った。しかし、一旦決めたら絶対に諦めない。そうした困難を 1 つ 1 つクリアして、克服をして、そしてスズキの素晴らしい社員の皆様と一緒に今のインドの自動車産業、そしてスズキの隆盛を作り上げた。こうした歴史のもとに、私たちは今ここにある。

もう 1 つは、モディ首相とお会いをしたことにあると思う。グジャラートの奇跡と言われるような大変な経済発展を成し遂げたモディ首相と[redacted]は相通ずるとこがあっただろう。グジャラート州とスズキがパートナーシップを組んだということも、これは 1 つの運命だと思う。

そうした長い歴史のもとに、私たちは今、静岡県とグジャラート州と大事なパートナーシップを結ばせていただいた。スズキが作り上げたこの歴史の上に、私たちは新たな歴史を作り上げようとしている。経済、教育、文化、観光、様々な分野で これからグジャラート州と静岡県は未来に向けて共に歩んでいきたい。

その中でも経済が大事。スズキは、これから自動車の生産を 100 万、そして 200 万、そして 2030 年には 400 万台にしていきたいという構想を発表された。そのためには、それを支える多くの企業が必要。

静岡県はものづくりの先進県。自動車産業の大きな広い裾野がある。そうした企業がこのインド、そしてグジャラートの成長を 1 つの大きなビジネスチャンスと見て、どんどんインドに進出をしようとしている。静岡県はこうした企業をしっかりと支援をしていきたい。ものづくりの中心であるモジャラードとものづくりの先進県である静岡が組めば、新たなものづくりの歴史が開かれるだろう。

2 つ目は、スタートアップ。私は知事になる前に、浜松市長を 16 年間務めてきた。その時に、スタートアップの育成、誘致に特に力を入れてきた。理由は 2 つある。

1 つは、スタートアップが集まる地域は必ず経済発展、経済成長すること。これは、シリコンバレーを含めて、世界のどんなスタートアップの集積にも同様。このグジャラートも今スタートアップで、新たな経済成長を必要としている。私もスタートアップを集めて、新たな地域の活性化を図りたい。

2 つ目は、スタートアップはこれからのいろんな社会の課題を解決する力を持っているということ。昨日、GIFT シティでスズキが新たに Next Bharat Ventures というファンドを創

設し、インドの様々な社会課題を解決する社会起業家を支援していく取り組みを始められた。とても素晴らしい取り組み。スタートアップにはこうした社会課題を解決する力がある。スタートアップのグジャラードと静岡県の交流、これは新たな未来を開くことになると思う。

静岡の農業の新しい生産技術を持った企業が今度インドへ進出をするという話を聞いた。インドの新しい農業生産の新しい形を自分たちの持つ技術でインドの農業を変えていきたいと、そんな思いで今度はインドへ進出するという話を聞いた。スタートアップというのはこういう力を持っている。グジャラートのスタートアップ、そして静岡県のスタートアップ、相互に交流することによっていろんな社会課題を解決する大きな力を発揮すると思っている。

そして、教育や人材交流。今、静岡県ではインドのIT技術者をはじめとする素晴らしい高度人材を県内の企業と結びつけようという取り組みをしている。すでにいくつかの成果が生まれている。

今回、杉山団長のお誘いで静岡県東部にある木村鋳造所という企業の社長が参加をしてくれた。鋳造技術というのはものづくりにとってすごく大事な技術。その鋳造の技術を、今インドの皆さんに鋳造技術を教えるべく、インドに進出をされるという風に聞いた。こうした人材の交流がすでに始まっている。お互いWin-Winになるよう、こうした人材交流もこれからどんどん進めていきたい。

そして、観光も大事。グジャラート州はとても素晴らしい歴史、自然、そして観光の資源にも恵まれている地域だと伺った。静岡県には富士山がある。無数の温泉や自然資源に恵まれた伊豆半島がある。中部には駿河湾がある。ここにはたくさんの海底資源が眠っているし、素晴らしい魚など、大いにこの地域を潤している。西部には、浜名湖という素晴らしい湖がある。

静岡県東部、中部、西部、それぞれ素晴らしい観光資源がある。これからぜひグジャラートの皆様にこうした静岡県の素晴らしさを感じていただくためにどんどん静岡へお越しいただきたい。パテル州政府首相閣下に来年にでもぜひ静岡へお越しをいただきたい。また、静岡の皆さんにも、どんどんグジャラートへ観光に行きましょうと、こんな取り組みをしたい。これから経済、教育、観光、文化、様々な分野で、グジャラートと静岡県の未来を作っていきたい。皆さん力合わせて、未来に向けてこれからスタートしましょう。

【所感】

今回、グジャラート州と静岡県が覚書を締結したことの本市に与える影響は大きいだろう。豊かな文化を持ちつつ、先進的な取り組みによってインド国内で最も工業化が進展しているグジャラート州の活力を静岡県ひいてはグジャラート州の最大都市であるアーメダバード市と提携する本市にその活力を取り込むチャンスだ。パテル州政府首相も我々を歓迎してくれた。今後の静岡県とインド・グジャラート州との協力関係に注視していきたい。

日時：2024年12月24日（火）15：00～16：30
訪問先：アーメダバード経営者協会（グジャラート印日友好協会）（以下、AMA）
目的：インドとの市民レベルでの友好関係を構築するため、音楽、美術、伝統芸能など文化的な交流の可能性を探る。

【グジャラート州印日友好協会　概要】
学術、ビジネス、文化面における日印の協力と理解促進を目的に197年に設立。アーメダバード経営者協会（AMA）と提携。会長は、[redacted]氏。

【鈴木俊宏　スズキ自動車代表取締役社長　挨拶】
マネージメントアソシエーションの皆様、本日はこのような機会を用意していただき、誠にありがとうございます。NGOであるAMAが、1967年からアーメダバードの未来を担う若い経験層や地域の方々に研修の機会を提供し、学術、産業、文化、それと多岐にわたる交流の場を設けられていることに心より敬意を表します。
2017年にスズキ・モーター・グジャラートが操業を開始いたしましたが、この会社を作るにあたり、改めて日本式、スズキ式の働き方を研修に取り入れ、多くの日本人指導員を派遣しました。1982年にインド政府と契約し、当時のマルチウドヨグ社へスズキ式を伝道しました。今回、AMAより、日本式、スズキ式の考え方をAMAでも検討したいお声がけをいただきました。私としても、スズキの考え方や働き方について、インドの皆様に限らず、社員にもしっかりと検証していかなければならないと考えましたので、大変良い機会だと賛同いたしました。セミナーの開催など協力していきたいと存じます。皆様のご支援をお願い申し上げます。
AMAにはグジャラート州と日本の友好をこれまで応援していただいております。今回訪問されている静岡県、浜松市の皆様とグジャラート州、アーメダバード市の友情とご来場の皆様のご多幸をお祈りして、私からのご挨拶とさせていただきます。

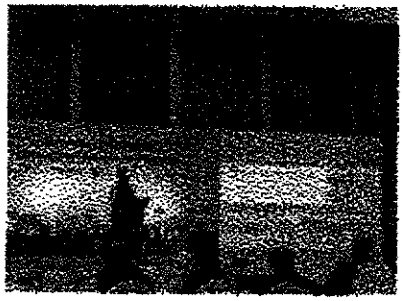




【所感】

アーメダバード経営者協会は、日本で言えば商工会議所のようなところであると思う。会長である[redacted]氏は、グジャラート印日友好協会の会長でもあり、非常に親日だ。今回の訪問は、我々の訪問団を歓迎いただき、静岡県ひいては浜松市の企業やとアーメダバード経営者協会に加盟する企業や団体等との友好的な発展に寄与するものと感じた。インド企業は日本式の経営手法やカイゼンなどを求めており、そういった中で日本企業が進出することも大いにあり得るだろう。両国が win-win になるためにもこういった協力関係を大切にし、今後の本市とアーメダバード市の企業間協力について引き続き模索していきたい。

日時：2024年12月24日（火）18：00～19：30
訪問先：ハイアットリージェンシーアーメダバード
目的：現地機関とのネットワークを構築する。



【マルバン　グジャラート州政府産業大臣　挨拶】

皆さんを心よりこの晩餐会に歓迎を申し上げます。ご出席いただいたということは、皆さんがこの関係を強化するために特別な努力をされている証であり、私にとって非常に誇らしいことだと思います。日本からだけではなく、本日インドからも多くの参加をいただきまして、この協力関係をさらに構築できることは私たちにとって誇りです。

インドと日本の関係は、国民に愛されている尊敬すべきモディ首相の長年のたゆまない努力のおかげです。モディ首相は私たちの関係を強化しただけではなく、世界に対してこの友情の新しい模範を表してくれました。パケル州政府首相も同じ道を歩んでいます。この晩餐会は単なるイベントではなく、両国、両地域の協力と連携の新しい時代の幕開けでもあります。この友情を祝福し、新たに共に前進する決意をいたしましょう。日本の企業がグジャラートを自分の故郷と思ってくれるような努力を、我々州政府もやっていきます。

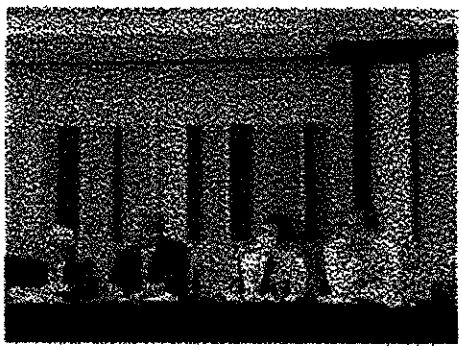
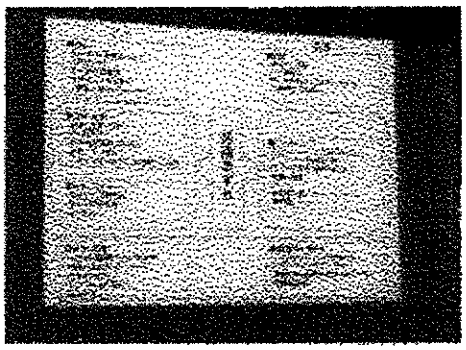
【[redacted]　在インド日本国大使館次席公使　挨拶】

本日、グジャラート州と静岡県、アーメダバードと浜松市の友好関係を実際に立会人として見させていただき感銘を受けました。 このグジャラート州と静岡は、インド、日本、それぞれ非常に力のある地域であり、それぞれの経済を引っ張っている地域とも言えるかと思います。さらに本日は友好協定も締結されたということで、もちろんスズキ自動車を代表とする自動車産業だけではなく、再生可能なエネルギー、クリーン技術、そして半導体といった分野においても、2 カ国間の間では大いに進展が期待できるものではないかと思います。そして、本日ここに来るまで多くの方々にご尽力いただいていること、本当に皆さんの努力を、在インド日本大使館を代表して、あらためて感謝したいと思います

【所感】

開始時間が遅れ、短い時間ではあったが、現地企業やJETROなどの現地日本機関などとも参考になる意見交換が実施でき実りある時間だった。こういった交流の場を重ねることが重要であると感じた。

日時：2024年12月25日（火）11：30～14：30
訪問先：IBIS NewDelhi Aerocity
目的：全日本空輸株式会社インド総代表兼デリー支店長にインドから日本に来ているワーカー層の現状及びインドの送り出し機関の現状等を把握し、本市へインド人材を呼び込むための可能性を模索する。

【中野祐介　浜松市長　挨拶】

本日は、全日空インドの[redacted]総代表兼デリー支店長に大変貴重なお時間をいただき、本当にありがとうございます。

今回、インドとの人材交流、人的交流の拡大を大きなミッションとしているわけでございます。浜松市はものづくりの街と言われており、ホンダ、楽器のヤマハ、ヤマハ発動機、そして何よりインドと大変縁の深いスズキ自動車、これも浜松発祥。非常にものづくりの盛んな町でございます。かつ、日本のその時々、時代の流れに応じて常に最先端の産業が起こり、成長、発展を遂げてきた街となっております。これからの日本の産業発展、経済発展を引き続き牽引できる地域だと思っている一方で、他の地方都市と同じく、人口の減少、それによる産業の担い手、これが今大きく制約を受けているところであり、様々な技術的な蓄積もあり産業の蓄積もある浜松ではありますけれども、人手不足が大きな制約となって産業、経済の発展、地域全体の発展の足を引っ張るような格好になりかねない状況にあるところでございます。そういった中、浜松のもう1つ特徴として外国人の皆さんと共生してきた街ということも言えるわけでありまして、1990年の入管法改正以来、南米の日系人の方々が大変多く浜松に入ってきていただきまして、その多くはブラジル人、そういった方々と共にこの地域の産業をまた地域全体を活性化するということを始めてからもう30年以上になっております。

現在、浜松市の人口は79万人ぐらいいますが、そのうちの3万人、大体4%弱が外国籍の方ということで、日本の国内においても国際化が進んでいる代表的な都市の1つだと思っております。そういったポテンシャル、利点も生かしながらぜひこの海外から多くの有利な人材を浜松に呼び込む、それによって浜松の経済、産業の発展をさらに進め、日本全体の